阿山郡伊賀町

天道遺跡発掘調査報告

1989・3

三重県教育委員会

序

四周を美しい山並に囲まれた伊賀の国は、郷土愛をこめて「伊山」郷と呼ばれてきました。またこの地は、東海道一番目の国として重要な位置にもあり、今日まで豊かな文化財が残されております。

阿山郡伊賀町西之沢に所在する天道遺跡も、原始から古代におよぶ人跡が認められます。この遺跡上に県道川東佐那具線道路特殊改良第１種事業が計画され、公共事業推進のために昭和63年７月から８月まで発掘調査を実施しました。その調査成果をここに報告いたしますが、当遺跡の事業部分はすでに失われ、今日この報告書を残すのみであります。せめてこの報告書が、文化「秘蔵の国」である「伊山」郷の歴史解明の一助となることを切望いたします。

調査にあたっては、県土木部道路建設課・上野土木事務所・伊賀町教育委員会はもとより、地元各位のご協力を得ました。末尾ながら記して謝意を表します。

平成元年３月

三重県教育委員会

教育長　中林　博

例　　言

1．本書は県道川東佐那具線特殊改良第１種事業に伴い、緊急発掘調査を実施した、阿山郡伊賀町大字西之沢に所在する天道遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は県土木部から執行委任を受けて、下記の体制で行った。

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　三重県教育委員会事務局文化課

主事　服部久士

埋蔵文化財研修生

平子　弘（県立四日市四郷高等学校教諭）

3．調査にあたっては、県土木部道路建設課・上野土木事務所・伊賀町教育委員会ならびに地元各位の協力を得た。

4．遺物整理・実測・写真は平子が担当し、報告書は服部・平子・技師山田猛が分担して執筆し、全体を山田が編集した。

5．図面上の方位は全て真北を示す。

6．写真図版の遺物番号は、実測図の遺物番号と対応する。

7．遺構表示には下記の略記号を用いた。

ＳＢ；竪穴住居　　ＳＫ；土坑　　ＳＤ；溝

8．スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

本 文 目 次

Ⅰ　前　言 …… 1
　1　調査に至る経過 …… (服部) 1
　2　調査方法と経過 …… (服部) 1
Ⅱ　位置と歴史的環境 …… (服部) 2
Ⅲ　遺構と遺物 …… 7
　1　基本層序 …… (平子) 7
　2　主要な遺構と遺物 …… (平子) 7
　3　包含層出土遺物 …… (山田) 20
Ⅳ　結　語 …… 22
　1　遺構について …… (平子) 22
　2　遺物について …… (平子) 22
　3　まとめ …… (山田) 25

図 版 目 次

PL.1　調査区遠景／調査区全景
PL.2　ＳＢ1・2 ／ＳＢ１の竈
PL.3　ＳＢ４／ＳＢ７
PL.4　ＳＢ７の竈／ＳＢ７の貯蔵穴
PL.5　ＳＢ６／ＳＢ６の竈
PL.6　ＳＢ5・6 ／ＳＢ８
PL.7　出土土器 (1)
PL.8　出土土器 (2)
PL.9　出土土器 (3)
PL.10 出土土器 (4)
PL.11 出土土器 (5) ／籠目土器

挿 図 目 次

Fig. 1　遺跡位置図 …… 3
Fig. 2　遺跡周辺地形図 …… 4
Fig. 3　調査区平面・断面図 …… 5
Fig. 4　遺構平面図 …… 6
Fig. 5　調査区土層断面図 …… 6
Fig. 6　SB1・2 実測図 …… 9
Fig. 7　SB1 竈実測図 …… 9
Fig. 8　SB3・4 実測図 …… 11
Fig. 9　SB5・6 実測図 …… 12
Fig.10　SB6 竈実測図 …… 13
Fig.11　SB7・8, SK10実測図 …… 14
Fig.12　出土土器実測図 (1) …… 15
Fig.13　出土土器実測図 (2) …… 17
Fig.14　出土土器実測図 (3) …… 19
Fig.15　出土土器実測図 (4) …… 20

表 目 次

Tab.1　試掘調査結果一覧表 …… 5
Tab.2　竪穴住居一覧表 …… 7
Tab.3　出土土器観察表 (1) …… 16
Tab.4　出土土器観察表 (2) …… 18
Tab.5　出土土器観察表 (3) …… 19
Tab.6　出土土器観察表 (4) …… 21
Tab.7　三重県内出土籠目土器一覧表 …… 23

Ⅰ 前　　言

1　調査に至る経過

三重県教育委員会事務局文化課では、国及び県にかかる各種公共事業に関して、各開発関係部局に対して事業照会を行い、事業予定地域内の文化財の確認とその保護に努めている。

県道甲南上野線の改良事業は、国道 163号線と交わる地点の北側まで完了しており、昭和61年度には阿山郡阿山町円徳院地内の東山古墳・桶崎氏城の発掘調査が実施された[(1)]。調査の結果、銅鏡や鉄剣が出土した東山古墳は伊賀地方で最古の古墳と判明し、文化課と県土木部の協議により同古墳を避けるように設計変更がなされ、保存されることになった。

昭和63年度の各種県営公共事業の照会に対し、昭和62年９月18日付で県土木部道路建設課から、先の県道甲南上野線と名阪国道壬生野インターチェンジを結ぶ区間の内、柘植川以南の部分を昭和63年度県道川東佐那具線特殊改良第１種事業とする工事計画の回答があった。そこで、文化課では事業地内の埋蔵文化財の有無について分布調査を実施し、新発見の遺跡として所在地の小字名をとって天道遺跡と命名した上で、遺跡範囲を土木部に通知した。

なお計画路線の周辺は、昭和63年度に県営圃場整備事業が予定されており、文化課による分布調査の結果、約40,000㎡の遺物散布地であることが判明した。その後昭和63年２月17日から２月19日にかけて約 248㎡（２m×４m×31箇所）の試掘調査を実施した。その結果約 7,000㎡を遺構が認められる遺跡範囲とした。

試掘結果をもとに県土木部と再度協議を行い、路線変更・設計変更による保存が難しいため、県道部分約 900㎡の本調査を実施することになった。

2　調査方法と経過

調査は県土木部の執行委任を受け、昭和63年６月29日から開始し、同年８月13日には現場調査をすべて終了した。調査面積は 900㎡である。

調査区は東西約15m、南北約60mであり、計画道路の中軸線を基準として、４m×４mのグリッドを設定した。そして南北方向に北から数字を、東西方向に西からアルファベットの記号を与え、北西杭をもってグリッド名とした。

調査は柘植川に近い北側から始め、表土約40～60cmについてはバックフォーによる掘削を行い、その後は作業員による包含層の掘削、遺構検出を行った。

調査日誌（抄）

6.22　調査区の確認・作業員の手配・排土の処理などについて、上野土木事務所と現地協議。
6.29　バックフォーによる表土除去開始。
6.30　同上。プレハブ設置。ベルコン（４台）・道具搬入。
7.1　バックフォーによる排土置場設定。
7.4　作業開始（18名）。伊藤係長・山田技師開始の挨拶のため来訪。調査区北端で竪穴住居を検出。
7.5　竪穴住居の埋土除去。北端中央に竈を持つ。
7.6　８ラインまで遺構検出進む。竪穴住居５棟になる。
7.7　竪穴住居の埋土除去。焼土付近からミニチュア土器出土。
7.8　10ラインまで遺構検出。上野土木事務所・伊賀町建設課・伊賀町社会教育課長来訪。
7.11　柘植小学校６年生55名見学。
7.12　12ラインまで遺構検出。竪穴住居７棟になる。
7.13　竪穴住居の埋土除去進む。竪穴住居個別写真撮影。
7.14～18　雨天のため作業中止。
7.19　13ラインまで遺構検出。竪穴住居７の貯蔵穴から完形の土師器壺出土。伊藤係長・阿山町教委来訪。
7.21　雨のため午後の作業中止。
7.22　調査区南側になり、瓦器をはじめ中世の遺物や小ピットが多くなる。ベルコン２台故障。大山田村教委来訪。
7.25　遺構検出すべて終了。竪穴住居は８棟になる。伊賀町霊山山頂遺跡調査中の石部正志先生ほか８名来訪。
7.26　埋土除去すべて終了。遺構・セクションの実測。
7.27　清掃。個別・全景写真撮影。遣り方実測の杭打ち。ベルコンなどのリース契約解除。
7.28　遣り方実測のための貫打ち・水糸張り完了（小林主事応援）。伊藤主幹・山田技師現地視察。作業応援いただく。川越高校歴史クラブ（稲垣教諭他教員１名・生徒２名）見学。
7.29　現地説明会の資料作り。例年より遅い梅雨明け宣言。
8.1　竪穴住居の補測。
8.2　道具撤去（小高主事応援）。午後係会議。
8.3　遺構実測（田中久生・小高主事応援）。現地説明会の資料作り。
8.4　遺構実測。プレハブ撤去。
8.5　遺構実測。午後係会議。
8.11　県庁・上野市政記者クラブで現地説明会資料提供。
8.12　現地説明会準備。
8.13　午後２時から現地説明会。途中から小雨ぱらつく。参加者約 100名。終了後、竈の断割り。現地調査終了。
8.17　上野土木事務所に現場引渡し。

Ⅱ　位置と歴史的環境

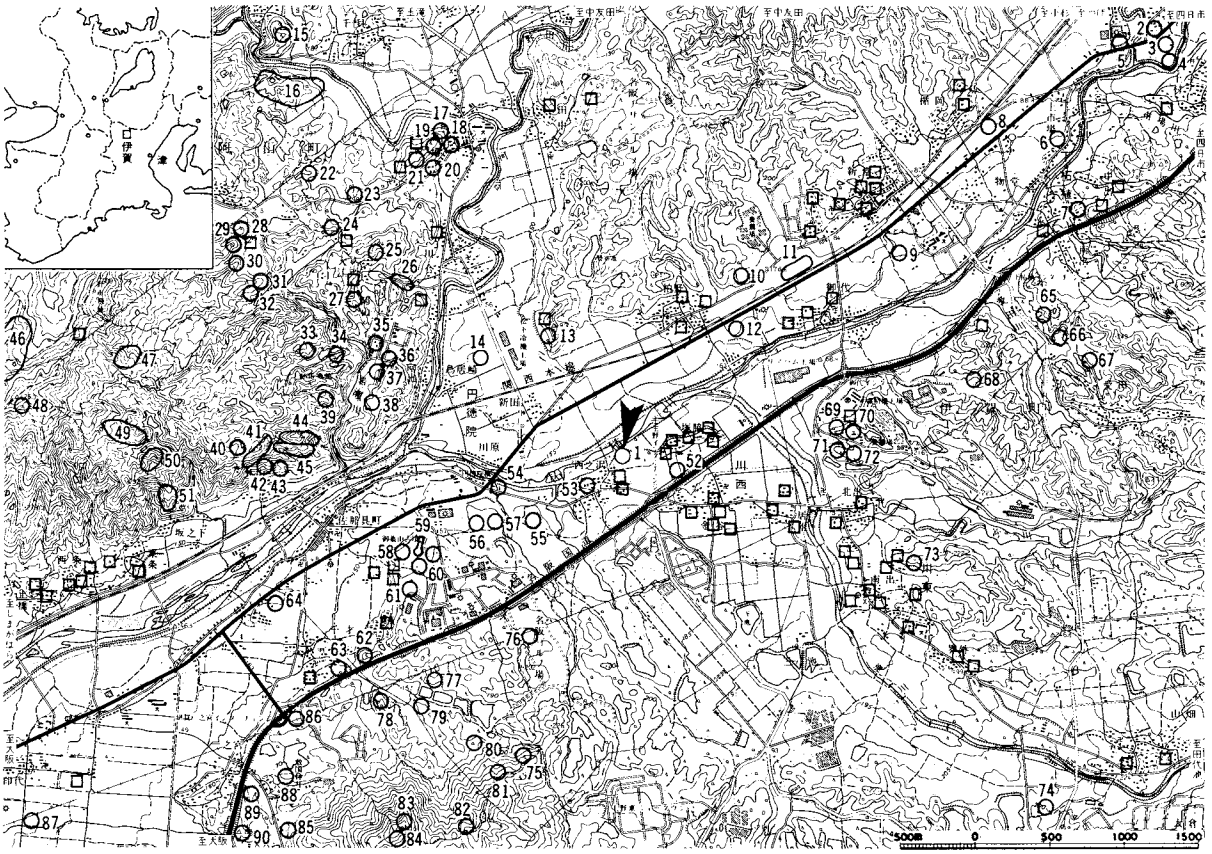
伊賀町は伊賀盆地の北東部に位置し、北は新生代第3紀鮮新世に形成された起伏の小さい水口丘陵で滋賀県と接し、東は鈴鹿山脈の加太峠を境として伊勢の鈴鹿郡関町と接している。鈴鹿山脈の一ツ家小平山に源を発する柘植川が町域を北東から南西方向に流れ、河岸段丘を発達させながら上野市に至り、木津川に合流して大阪湾に注いでいる。

天道遺跡(1) は伊賀町の南西端に位置し、標高約163mの柘植川南岸の河岸段丘面上の縁辺部に立地する。遺跡の北側は柘植川河床と約10mの比高をもつ急峻な段丘崖が形成されており、遺跡南方の後背部はわずかに低くなっている。一方、対岸の柘植川北岸の河岸段丘には複数の段丘面が見られ、なだらかに比高を増している。行政上当遺跡は阿山郡伊賀町大字西之沢字天道に所在し、遺跡のすぐ南西には現在の西之沢の集落が形成されている。遺跡所在地の現況は水田であり、段丘崖に近い所には竹林がみられる。

天道遺跡の周辺地域では、古墳時代以前の遺跡はこれまでわずかしか知られていない。縄文時代では、サヌカイト製の有舌尖頭器が採取された小波田遺跡[2](67)のほか、当遺跡のすぐ東方の川西字野々奥で磨製石斧が、西方約2kmの丘陵上の阿山ハイツ団地造成地で石鏃が採取されているに過ぎない[3]。弥生時代では、下流の柘植川南岸に喜春遺跡(61)、新寺遺跡(87)が所在するほか、千歳付近で銅鐸の飾耳が出土している[4]程度であった。しかし近年の開発に伴う調査により新知見が加わっている。奥弁天4号墳(40)の調査では、墳丘周辺から石斧・削器・石匙など縄文時代の石器が出土している[5]。また天道遺跡の対岸の柘植川と河合川に挟まれた沖積地で、県営圃場整備事業に伴い確認された北中溝遺跡(14)では、弥生時代後期から古墳時代初めにかけての土器が出土している[6]。この北中溝遺跡より上流部では、現在のところ弥生時代の遺跡は発見されていない。上野市印代の伊賀国府跡と推定されていた地域では、県営圃場整備事業に伴う確認調査が行われた際に、弥生時代後期の集落跡が広がっていることが判明している[7]。弥生時代以前の歴史的環境も、今後より詳細な踏査によって次第に明らかになっていくものと思われる。

古墳時代になると、天道遺跡の対岸の水口丘陵の先端部に東山古墳(13)が築造される。県道甲南上野線道路改良工事に伴って発掘調査され、割竹形木棺の主体部を有し、中国後漢時代の四獣鏡や古式土師器・鉄剣・銅鏃などの副葬品が出土している[8]。4世紀前半の築造と推定されており、伊賀地方で最古の古墳とされる。その後、河合川および柘植川右岸の信楽高原と呼称されている丘陵地と、柘植川左岸の南宮山の山麓丘陵を中心に多数の古墳が築造される。それに対し天道遺跡以東の柘植川流域では、古墳の分布は稀薄である。円筒埴輪片の出土した新堂古墳(9)、木炭槨の内部主体をもち、5世紀末の須恵器・環頭太刀・勾玉が出土した天長山1号墳[9](69)、横穴式石室を有し、6世紀後半の土器が出土した筒御前古墳[10](2)、6世紀前半の木棺直葬と考えられている権現山古墳[11](10)や菰池1号墳[12]をはじめとして、川西古墳(52)・内田古墳群(71・72)など小規模な円墳が点在するに過ぎず、歴史時代に入ってから開発が進んでいったものと推察できる。

信楽高原の丘陵上には、前期古墳で三角縁神獣鏡が出土した山神寄建神社古墳をはじめ、馬具や円筒埴輪が出土し、6世紀前半の築造とされるキラ土古墳(34)、全長40mの前方後円墳の宮山1号墳(17)、巨大な石室を有する御旅古墳(18)などがある。また全長約60mの外山1号墳、円筒埴輪の採取された外山3号墳などの前方後円墳を含む外山古墳群(41)や奥弁天古墳群・源六谷古墳群・樋口谷古墳群(47)・石打古墳群(49)・奥ヶ谷古墳群(50)、墳丘裾部に列石を巡らした方墳を含む波敷野古墳群[13](46)など、6世紀から7世紀前半の古墳200余基が分布している。さらに長さ4.6m、幅3.6m、高さ2mの玄室をもち、巨大な天井石が現存する勘定塚古墳[14](43)が丘陵裾部に築造されている。なお源六谷1号墳(39)は6世紀前半に築造された複数の木棺直葬の主体部をもつもの



1 天道遺跡	16 又木谷古墳群	31 馬塚古墳	46 波敷野古墳群	61 喜春遺跡	76 殿山古窯跡
2 筒御前古墳	17 宮山1号墳	32 立石2号墳	47 樋口谷古墳群	62 銅鐸出土推定地	77 狐山古墳
3 斎宮芝遺跡	18 御旅古墳	33 笹尾1号墳	48 塔の峯古墳群	63 浅間山古墳	78 奥山田古墳
4 塚原古墳	19 宮山2号墳	34 キラ土古墳	49 石打古墳群	64 宮ノ森遺跡	79 西の谷古墳
5 狐塚古墳	20 田藤古墳	35 上丸川1号墳	50 奥ケ谷古墳群	65 界外古墳	80 茶山古墳
6 上市場遺跡	21 宮山3号墳	36 上丸川遺跡	51 蔦枕古墳群	66 平塚遺跡	81 大岩古墳群
7 中出古墳	22 土穴遺跡	37 上丸川2号墳	52 川西古墳	67 小波田遺跡	82 ひよどり塚古墳
8 尾形塚古墳	23 土穴古墳	38 大日堂1号墳	53 宮畠遺跡	68 御代南古墳	83 宮之谷古墳
9 新堂古墳	24 土穴2号墳	39 源六谷1号墳	54 一本木古墳	69 天長山1号墳	84 尾の谷古墳
10 権現山古墳	25 割尾山古墳	40 奥弁天4号墳	55 一本木遺跡	70 天長山2号墳	85 大岩祭祀跡
11 東沖遺跡	26 羽広古墳群	41 外山古墳群	56 庚申塚古墳	71 内田1号墳	86 丹那山古墳
12 的場遺跡	27 三蓋古墳	42 綾の森古墳	57 かねつき藪古墳	72 内田2号墳	87 新寺遺跡
13 東山古墳	28 野木古墳	43 勘定塚古墳	58 天王下1号墳	73 丸山古墳	88 北谷古墳群
14 北中溝遺跡	29 野城古墳	44 石原古墳群	59 御墓山古墳	74 西ケ崎古窯跡	89 城山古墳
15 五右江門塚古墳	30 立石1号墳	45 鷺棚古墳群	60 御墓山陪塚	75 桜谷古墳	90 二の谷古墳

Fig. 1　遺跡位置図（1：50,000）（国土地理院 1：25,000『上野』から）　□印　中世城館

で、奥弁天4号墳(40)は6世紀後半に築かれた片袖の横穴式石室を有する円墳であることから明らかにされている。[15]

一方、柘植川南岸の南宮山山麓丘陵は、5世紀前半の築造と推定される全長 188mの県下最大の規模を誇る御墓山古墳(59)が、前方部を北にして位置する。ほかに浅間山古墳(63)・大岩古墳群(81)・丹那山古墳(86)などが分布している。

古墳の築造数に比べて、柘植川流域の古墳時代の集落遺跡は現在のところ知見例が少ない。伊賀地方では、上野市の木津川左岸で調査された北堀池遺跡で古墳時代の水田跡と57棟の竪穴住居跡が発見されており、[16]集落構成を考える上でも注目される遺跡である。その他、約60棟の竪穴住居跡や掘立柱建物跡を検出した辻垣内遺跡・上東野遺跡、[17]5角形の竪穴住居跡が検出された坂之上遺跡、[18]排水溝を伴う前期の竪穴住居跡が検出された小上野西谷遺跡[19]などがある。柘植川流域では、前述の北中溝遺跡のほか一本

木遺跡(55)、的場遺跡(12)、上野市の宮ノ森遺跡(64)や喜春遺跡(61)で古墳時代の遺構が確認されている。北中溝遺跡では古墳時代初頭の竪穴住居跡11棟と大溝が検出され[20]、伊賀地方最古の東山古墳との関連が注目される。一本木遺跡では土坑が検出され、6世紀代の須恵器が出土している[21]。的場遺跡でも土坑が検出され、6世紀前半の須恵器が出土している[22]。宮ノ森遺跡では古式土師器が出土しており、4棟の竪穴住居跡が検出されている[23]。喜春遺跡では古墳時代の溝が検出されているが[24]、大部分が試掘坑のため集落の確認までには至っていない。

古代において伊賀国は阿拝郡・伊賀郡・山田郡・名張郡の4郡から構成されていた。柘植川流域は阿拝郡に属し、伊賀国府が置かれ、政治の中心であった。国府の位置については、上野市印代地区に想定する説が有力であったが、今年度から実施されている範囲確認調査[25]により、従来の推定地には存在しない可能性がきわめて高くなってきている。天道遺跡南西の殿山古窯跡(76)からは、忍冬唐草文の軒平瓦や布目瓦が採集されている[26]。古代の交通路については、仁和2年(866年)に阿須波道という鈴鹿峠が開通するまでは、奈良・平安の都から伊賀町柘植を経由するルートが東海道であった。交通の要所にあたる斎宮芝遺跡(3)からは、7世紀中頃の須恵器や土師器が出土している[27]が、斎王群行との関連は明確ではない。奈良・平安時代には多くの寺領荘園が進出し玉滝荘・柏野荘・壬生野荘・河合荘などが経営された。柏野荘の荘域内と考えられる的場遺跡からは、平安・鎌倉時代の掘立柱建物跡が検出されている[28]。また東方に聳える霊山(765m)の霊山山頂遺跡には平安時代以降の墓地や郭群などがあり[29]、当時の信仰の一端を窺い知ることができる。

中世後期には小規模な城館が多数営まれた。丘陵の先端部などには城跡が多く、平地では各集落に2～4箇所ずつの館跡が分布する。当遺跡周辺では西之沢地内で中林氏館・家喜氏館が、脇塚地内で福西氏館・内山氏館・大西氏館が確認されている。近年中世城館の発掘調査例も増加しており、伊賀国内の中世城館の成立過程や城館の性格についての解明も進んできている。

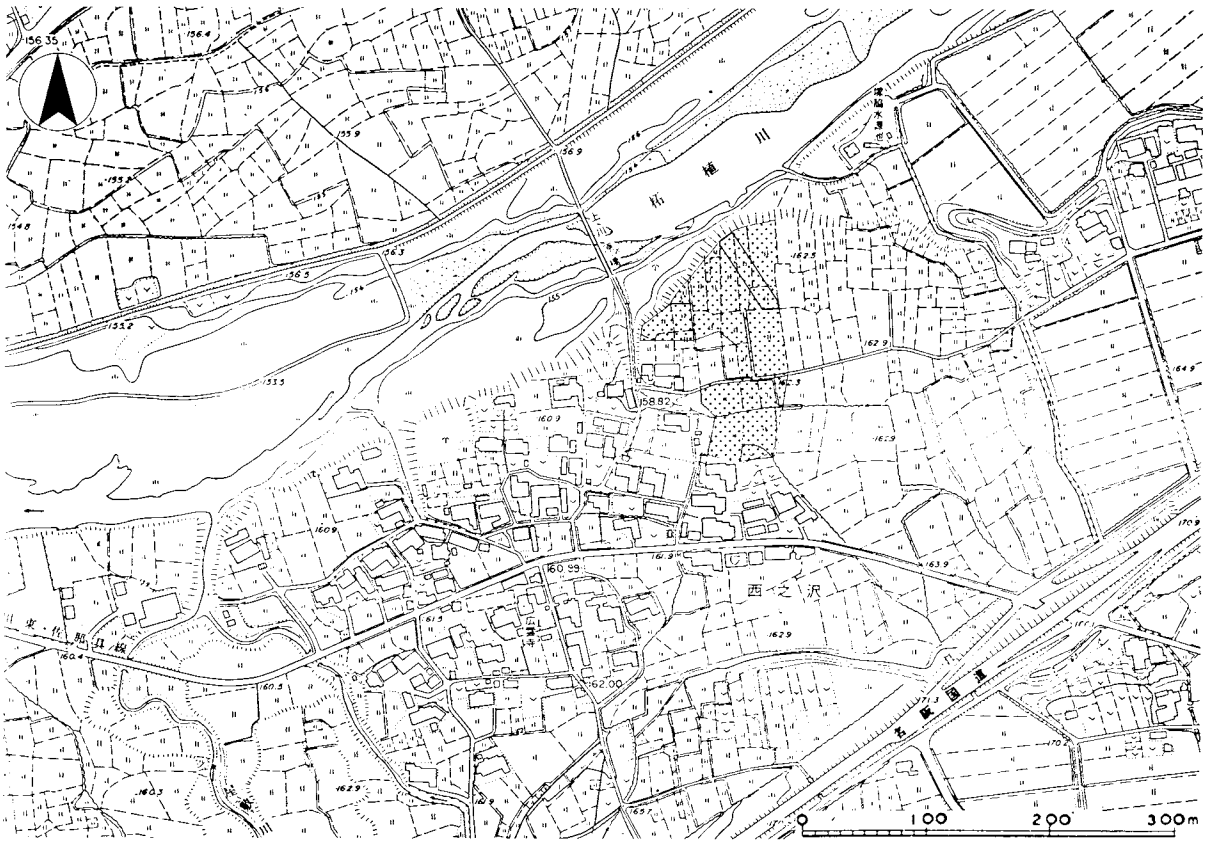
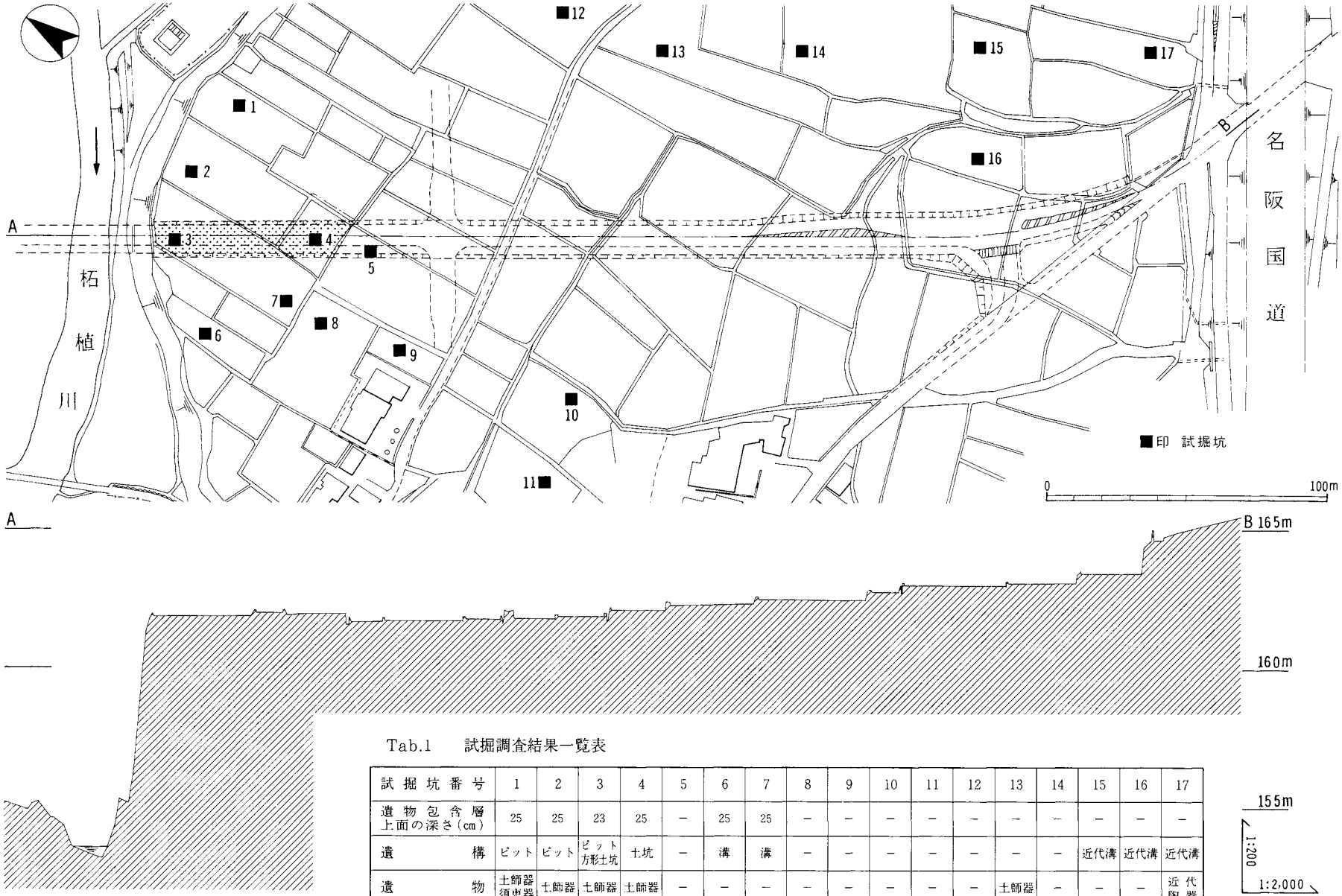


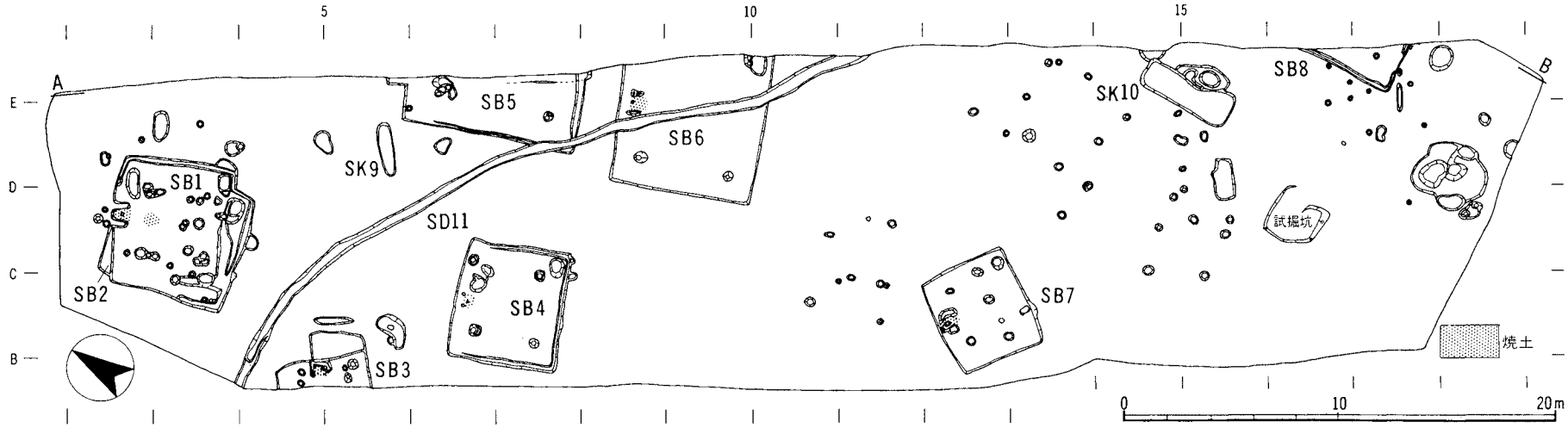
Fig.2　遺跡周辺地形図（1：6,000）（伊賀町都市計画図　1：3,000から）

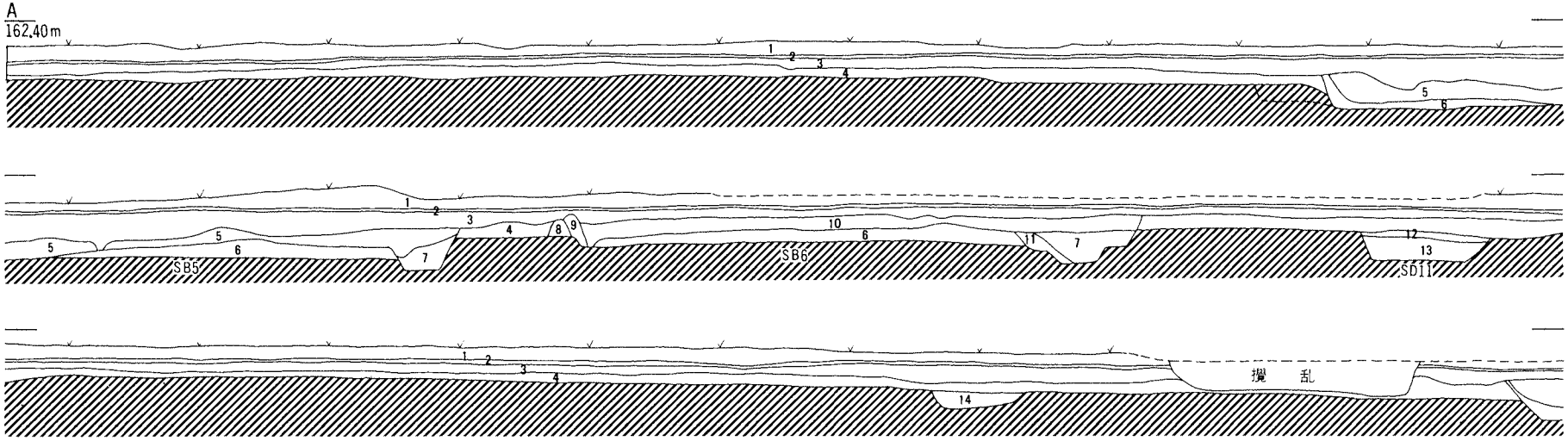


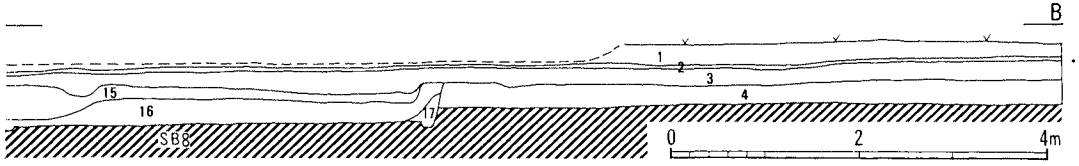
Tab.1　試掘調査結果一覧表

試掘坑番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
遺物包含層上面の深さ(cm)	25	25	23	25	−	25	25	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
遺構	ピット	ピット	ピット 方形土坑	土坑	−	溝	溝	−	−	−	−	−	−	−	近代溝	近代溝	近代溝
遺物	土師器 須恵器	土師器	土師器	土師器	−	−	−	−	−	−	−	−	土師器	−	−	−	近代陶器

Fig.3　調査区平面・断面図（1：2,000）







1 表　土
2 赤褐色粘質土
3 茶褐色粘質土
4 黒褐色粘質土
5 茶褐色砂質土(炭・焼土含む)
6 黒灰色砂質土
7 暗褐灰色砂質土
8 灰黒色砂質土
9 黄褐混り茶褐色砂質土
10 灰褐色砂質土
11 暗黄褐色砂質土
12 明茶褐色砂質土
13 黒褐色砂質土
14 暗茶褐色砂質土
15 暗褐色砂質土
16 暗灰褐色砂質土
17 黄褐混り暗灰褐色砂質土

Fig.4　遺構平面図（1：300）　　Fig.5　調査区土層断面図（1：80）

Ⅲ 遺構と遺物

1 基本層序

調査区の標高は162m前後で、全域にわたってほぼ平坦である。土層観察には、竪穴住居などの遺構を切っており、比較的攪乱も少なく、表土から連続する良好な断面が遺存する調査区の東壁面を選んだ。調査区全域にわたって共通して認められる基本的な層序は次の５層である。厚さ20cm前後の水田耕作土の下層には、それに伴う床土と考えられる厚さ数cmの赤褐色粘質土が認められる。第Ⅲ層は厚さ10～20cmの茶褐色粘質土、第Ⅳ層は10～20cmの黒褐色粘質土であり、この２層には遺物が含まれる。包含層出土遺物は縄文時代後期から中世まで広い時期幅をもつが、その量はきわめて少ない。したがって出土遺物の大半は遺構に伴うものである。古墳時代後期に比定される遺構は第Ⅳ層を切り込んで形成されている。その上層の第Ⅲ層を切り込んでいる遺構は認められない。最下の第Ⅴ層は多くの礫を含む黄褐色粘質土である。表土から第Ⅴ層上面までの深さは40～65cmで、各層はほぼ水平に堆積している。

各遺構の埋土はおおむね黒褐色土ないしは黒灰色土であり、第Ⅳ層上面では遺構埋土を峻別できず、検出面を第Ⅴ層上面まで下げざるを得なかった。検出した遺構は竪穴住居・土坑・ピット・溝などであるが、その大半は古墳時代後期に属するものである。

以下、遺構を中心にしてこれに伴う遺物について記し、最後に包含層出土遺物について概述する。

2 主要な遺構と遺物

ＳＢ１ 調査区の北端に位置し、ＳＢ２と重複する。ＳＢ１の埋土の上層には暗茶褐色土、下層には暗灰褐色砂質土が認められ、これらがＳＢ２の埋土である黒褐色土を切り込んでいる状況を確認した。ＳＢ１はＳＢ２より後出すると判断される。またＳＢ１の床面はＳＢ２の床面より約10cm深い。平面形は東西5.9m、南北5.3mの方形で、床面積は31.3㎡である。竪穴はほぼ垂直に掘り込まれており、検出面からの深さは平均37cmを測る。床面には多数のピットが検出されたが、周壁から1.4m前後離れた4つのピットが主柱穴と想定される。柱間は東西2.8m、南北2.7mである。主柱穴の規模は直径30～50cm、深さ43～52cmである。

周溝は幅約20cm、深さ数cmで、床面縁部を全周することなく部分的に巡る。東辺の周溝は東南隅の貯蔵穴に接続し、北・南・西辺ではそれぞれピットに接続して途切れる。これらのピットと周溝との切り合い関係は認められず、周溝埋土の掘削を終えた時点で、周溝の先端部にピットを検出した。これらのピットは主柱穴に比べてかなり浅く、深さは10～30cmで、直径は周溝の幅にほぼ等しい。これらのピットと周溝は関連のない遺構とは考え難く、両者は一連の施設である可能性が高い。周溝が接続するピットというよりも、むしろ周溝先端部をより深く掘削したものと解釈することも可能であろう。周溝の機

ＳＢ番号	規模 東西(m)	規模 南北(m)	規模 面積(㎡)	主柱間(m) 東西	主柱間(m) 南北	深さ(cm)	竈	周溝	貯蔵穴	方向	時期	備考
1	5.9	5.3	31.3	2.8	2.7	37	北壁	有	北東隅 南東隅	N-24°-W	6C中葉	SB2より新しい,支石,袖石,増築
2	5.5	6.0	33.0	3.2	2.2+1.8	27	－	有	南東隅	N-13°-W	6C前葉	SB1より古い,6本主柱
3	－	4.3	－	－	2.2	15	東壁	無	南東隅	N-42°-W	6C後半	支石
4	5.6	5.0	28.0	3.2	2.7	25	北壁	有	南東隅	N-22°-W	6C中葉	支石
5	－	8.0	－	－	5.1	22	－	有	－	N-22°-W	6C中葉	SD11より新しい
6	(7.6)	6.8	(51.7)	5.4	4.2	16	北壁	無	南東隅	N-22°-W	6C中葉	SD11より新しい
7	4.4	4.8	21.1	1.7	2.5 3.3	15	西壁	無	北東隅	N-31°-E	6C中葉	支石,柱間不整
8	－	－	－	－	－	15	－	有	－	N-6°-W	－	

Tab.2 竪穴住居一覧表　　— 不明, ( ) 推定

能については、壁面保護のための擁壁や壁面化粧材の下端部の痕跡と考えられるものも存在するが、一般的には床面の湿気を抜き、乾燥を保つための施設と考えられている。降雨時には周壁や床からの浸透水を周溝を通じてこのピットに導くことにより、除湿・排水の効果をより高めたであろう。これらのピットは周溝の除湿・排水機能を補完する施設と考えられる。

床面の北東隅と南東隅の2箇所に貯蔵穴を検出した。北東隅の貯蔵穴は竈の東に位置し、長径約1.4m、短径約60cmの長楕円形を呈し、底部は平坦で深さは約20cmである。出土遺物には土師器甕(1・6)、須恵器杯身（19・23）がある。南東隅の貯蔵穴は不整形な方形を呈し、長辺約80cm、短辺50～60cm、深さはわずか12cmで、底は平坦である。この貯蔵穴には周溝が接続し、遺物の出土はない。これら2つの貯蔵穴には形状・深さ・遺物の有無などの相違点が認められるが、それはそれぞれの機能の差に起因するものであろうか。

竪穴住居の長辺である北壁のほぼ中央に竈がある。天井部は崩壊しているが、遺存状態はおおむね良好といえよう。竈の両袖はほぼ平行に張出す。竈体は黄褐色粘質土で築成されており、側壁・奥壁の下半は火を受けて赤褐色を呈する。竈壁の厚さは両袖基底部で約30cm、焚口の幅は約60cm、両袖の先端から奥壁までは約70cmを測る。支石が火床のほぼ中央部に、奥壁の方向にやや傾いた状態で検出された。支石は長さ32cm、直径約10cmの円柱状の川原石で、床面上に露出する部分の長さは約20cmである。また両袖先端部の内側には、一対の偏平な板状の川原石がある。石の偏平な面を竈の内壁の面に揃えて貼付けられている。この袖石は焚口部の内壁を保護・補強するもと考えられる。竈内から出土した遺物には土師器甕(3・9)、ミニチュアの杯(12)がある。完形の土師器甕(9）は支石の手前約20cmの焚口部の床面から、横に倒れた状態で出土した。外面には煤の付着がみられる。

竈の南の床面にきわめて明瞭な、直径約60cmの円形の焼土を検出した。焼土面の絶対高は161.25mで、ＳＢ１の床面および竈の火床面と同レベルである。この焼土をＳＢ１に属する炉跡と考えると、竈と炉が同一住居内に共存し、それぞれの機能によって使い分けられていたと推測される。しかし竈の先端と焼土の北端とはわずか40cmほどしか離れておらず、同時に使用することが物理的に不可能であるという点を考慮するならば、この焼土はＳＢ１に先行するもう１棟の竪穴住居の竈跡である可能性が高い。前述のように、ＳＢ１の床面には多数のピットが検出されたが、その中にはＳＢ１および重複するＳＢ２の主柱穴と推定されるもの以外にもなお多くのピットが存在する。このような状況は他の６棟の竪穴住居にはみられない。さらにＳＢ1・2の主柱穴以外のピットの中から、この焼土の属するもう１棟の竪穴住居の４主柱穴を抽出することも困難ではない。遺構実測図中に想定される３棟の主柱穴を示した。これによると東西の柱間はほぼ等しく、南西・南東のそれぞれの柱穴は近接している。しかし北西・北東の柱穴は北方向にそれぞれ約70cm移動している。この状況から、ＳＢ１に先行する竪穴住居を同一床面上に北方向へ拡張・増築したものと考えられる。なお前述した南東隅の貯蔵穴は、この増築前の竪穴住居に属する可能性もある。

ＳＢ１からは床面直上ないしは床面に密着した状態で出土した土器がかなりあり、その中の４点(8～10・22）は完形である。住居は様々な要因によって廃絶されたのであろうが、ＳＢ１の場合はそれまで使用されていた土器の多くを搬出することなく、住居の廃絶と同時に土器の廃棄もなされたものと推測される。土師器杯(10)は竈の西の床面から正立状態で出土した。竈と北東隅貯蔵穴との間の床面からは、土師器甕(8）をはじめ長胴甕もしくは甑の一部と推定される破片が多数出土している。須恵器杯身(22)は北西の主柱穴の西の床面から正立状態で出土した。北東と南西の主柱穴周辺からは土師器片がそれぞれ数点出土している。古墳時代後期の竪穴住居内の容器の場は、主柱穴と周壁間の床面外区、しかも竈とその横の貯蔵穴周辺に集中するという指摘があるが[30]、ＳＢ１の場合も例外ではない。ただし竈周辺以外の床面出土遺物については、主柱穴の周辺に偏在する傾向が認められたことを付け加えておきたい。

確実な伴出遺物と認定できる須恵器（15・19・22・23）は、陶邑田辺編年[31]のＴＫ10型式に併行するもの

であろう。ＳＢ１の時期は６世紀中葉と考えられる。

ＳＢ２　調査区の北端でＳＢ１と重複して検出された。床面の約90％は後出のＳＢ１によって削平されており、出土遺物もきわめて少ない。平面形は東西5.5m、南北6.0mの長方形で、床面積は33.0㎡である。検出面からの深さは27㎝を測る。周壁から1.4m前後離れた位置にあるピットが主柱穴と推定できるが、北と南の主柱穴を結んだ線上のほぼ中間の地点にもそれぞれピットが存在する。このピットから北の主柱穴までは2.2m、南の主柱穴までは1.8mを測る。この２つのピットは４主柱穴と比較しても大きさや深さに大差がないことから、これらも主柱穴と考えられ、６本主柱の可能性がきわめて高い。東西の柱間は 3.2mを測る。主柱穴の規模は直径30～50㎝、深さ25～44㎝である。

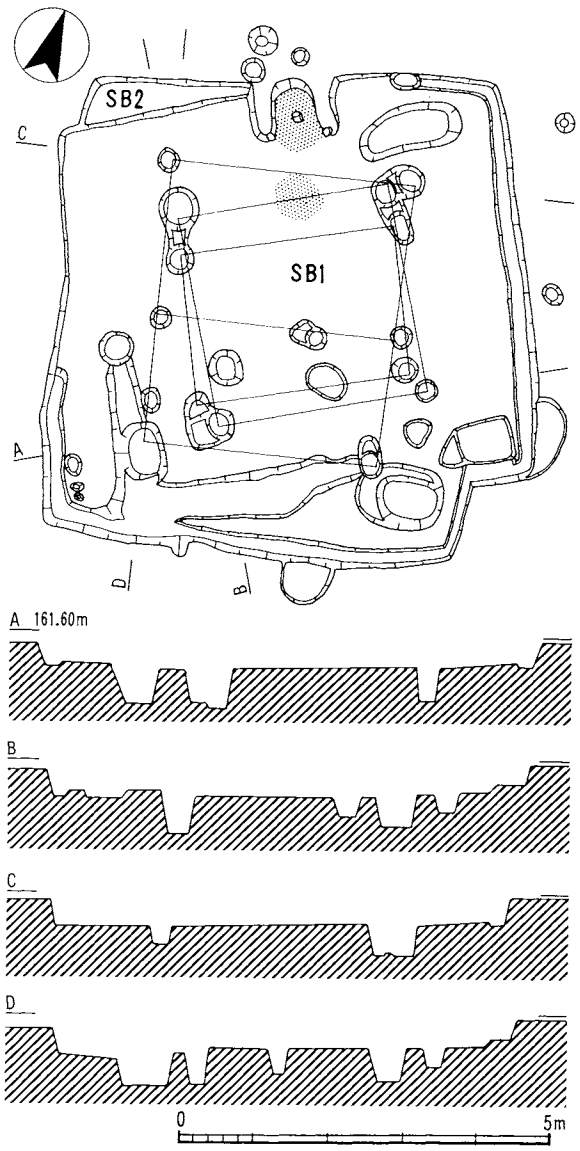


Fig.6　SB1･2実測図（1：100）

周溝の幅は20㎝前後で、深さは５～８㎝である。南・東辺には確認できるが、西辺では途切れる。また北西隅周辺では北・西辺ともに確認できない。後出のＳＢ１によって周壁の大半が失われているため全容は不明である。

床面の南東隅に長径約120㎝、短径90㎝の楕円形の貯蔵穴を検出した。底は平坦で、深さは50㎝を測る。貯蔵穴内側の西から北にかけてテラス状の段差が認められる。出土遺物には土師器甕(24)・土師器壺(25)・須恵器高杯(28)がある。

ＳＢ２の伴出遺物と認定できるものは（24～28）である。須恵器高杯(28)は長方形の透しを１段３方につけ、脚部の広がりは少なく、基部は太い。完形の須恵器杯身(27)は床面南西隅のピットから出土した。口径13.2㎝を測る大形で、立上がり端部は内傾し浅い凹みが認められ、受部は外上方に延びる。両者とも陶邑のＭＴ15型式に併行するものであろう。ＳＢ２の時期は６世紀前葉と考えられる。

（29･30）は埋土中から出土しており、残存度も低いことから、竪穴住居の埋没時に混入したものと判

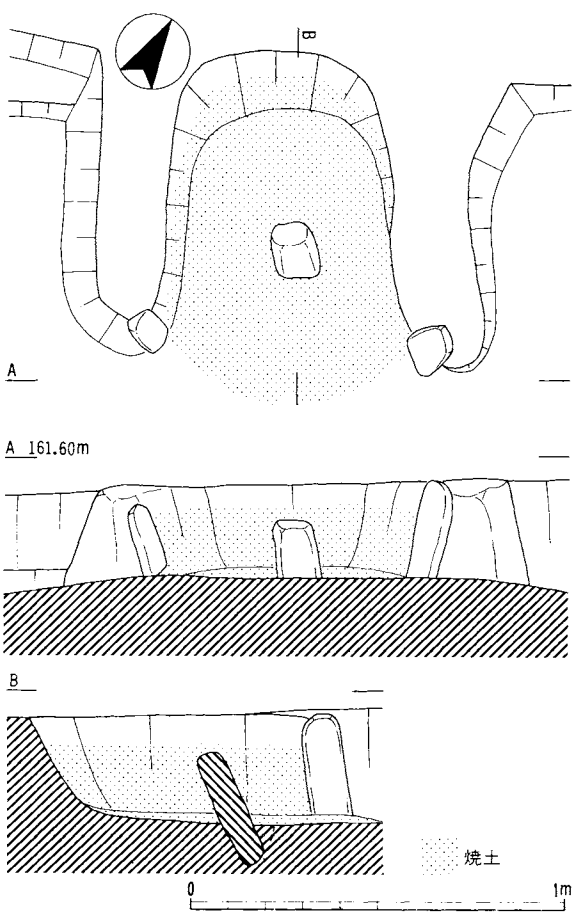


Fig.7　SB1竈実測図（1：20）

断される。土師器甕(29)は頸部内外面に稜線をもち、口縁端部にはつまみ上げによる小さな立上がりが認められる。両者はともに庄内式後半期に併行するものと考えられる。(32～34)はともに外面に明瞭な籠目圧痕をもつ。(31)と(32)は明らかに同一個体である。ともに色調は紫褐色を呈し、器壁は薄く、胎土は緻密で、焼成も良好である。口縁部は外反し、端部はやや肥厚する。庄内式後半期から布留式初頭に併行するものであろう。胴部外面に認められる圧痕から、押圧原体となった籠は断面が方形を呈する硬い竹ひごのようなもので編まれていたと推定される。幅3㎜前後の経条と幅1～1.5㎜の緯条によって「ザル目編み」されたものである。通常、籠には丸くタガ状に縁が施されるが、この土器の原体となった籠には縁の処理がまったく行われておらず、経条が上部に突出したままである。また口縁端部では、緯条が経条に編み込まれていない部分さえ認められる。土器の外型として用いられる「籠にこの縁のないのは、これに縁があっては泥型としては縁の為に抜き取れないものとなる故[32]」籠を編む際にあえて口縁部の処理を省いたものであろうか。あるいは縁の破損した籠を土器の押圧原体として転用したものであろうか。(33)は明黄褐色を呈し、器壁は厚く、内外面には黒斑が認められる。これには籠に施されたタガ状の縁の圧痕が認められる。このような縁のある籠を押圧原体として用いた例には、塩西遺跡の「埦型土器[33]」がある。押圧原体となった籠は高さ4㎝、直径約19㎝と推定され、幅3㎜ほどの経条と幅1㎜ほどの緯条とによって編まれている。圧痕の一部に籠目の方向が他の部分と異なる箇所が認められる。意識的に複数回の押圧がなされたのであろうか。あるいは籠型を取り外す際に生じた偶然の所産であろうか。底部は経緯の各条を2本1組として「網代編み」している。底部から側部の「ザル目編み」に移る間には、斜行文状の圧痕が3～4段認められる。これは小林行雄氏のいう「綾編み[34]」に相当するものと思われる。押圧原体の籠はこの3種の編み方を用いた「典型的な手法の籠[35]」ということになる。(34)にも「ザル目編み」の圧痕が認められるが、摩耗が著しくしかも小片であるため器種・部位の特定は困難である。(31)は南西隅の主柱穴から出土した。(32)は南西隅の主柱穴、周溝脇のピット、埋土下層の3地点から出土した破片を接合し得たものである。(33)は南西隅の主柱穴から、(34)は南西隅の周溝から出土している。これらの籠目土器は、その残存度や出土状況から、竪穴住居の埋没時に混入したものと考えるのが妥当であろう。なお籠目土器については県下の出土例も合わせて「Ⅳ結語」の章で補足したい。

ＳＢ３　調査区の北西隅に位置し、ＳＢ１・２およびＳＢ４に隣接する。竪穴住居の西半が調査区外に及んでいるため、東西の規模は不明である。東側では深さ数㎝ほどの方形の土坑と重複するが、竪穴埋土である明褐色砂質土が土坑埋土の暗褐色土を切っている。平面形は方形で、南北4.3m、深さはわずかに10～15㎝を測るのみである。周壁から1m前後離れた位置にあるピットが主柱穴と想定される。南北の柱間は 2.2mである。主柱穴の規模は直径30～45㎝、深さは約40㎝を測る。南東の主柱穴からは土師器甕(69)が出土している。

床面の南東隅に直径約50㎝、深さ約25㎝の円形の貯蔵穴を検出した。土師器甕(70)・須恵器杯蓋(71)をはじめ多数の土師器片が出土した。

当調査区内で東壁に竈をもつ竪穴住居はこのＳＢ３だけである。竈の両袖はほぼ平行に周壁から50～60㎝張出すが、竈体基底部が床面から数㎝残存するのみで、上部構造の大部分は削平されている。両袖間の距離は約60㎝である。火床のほぼ中央部に、直立した状態で支石が検出された。焼土面上に露出した部分の長さは16㎝である。竈内からは土師器の甕ないしは甑の一部と推定される破片が多数出土した。また竪穴埋土中からも多量の土師器片が出土したが、そのほとんどは磨滅の著しい細片である。

貯蔵穴出土の須恵器杯蓋(71)は口縁部を欠く破片ではあるが、ＳＢ３の時期を推定し得る唯一の須恵器である。確かな伴出遺物とは認め難いが、少なくとも竪穴住居の埋没開始直後の遺物ではあるだろう。天井部と口縁部との境界には、わずかであるが凹線が認められる。陶邑のＴＫ10～ＴＫ43型式に併行するものであろうか。

ＳＢ４　調査区の北部、ＳＢ３の南東に位置する。平面形は東西5.6m、南北5.0mの方形を呈し、床面積は28.0㎡である。検出面からの深さは北壁で10㎝、

南壁で25cmを測る。主柱穴は周壁から約1.2m離れた、竪穴住居の対角線上に整然と配される。柱間は東西 3.2m、南北 2.7mを測り、4主柱穴を結んでできる四角形は竪穴住居の平面形と相似する。主柱穴の規模は直径約50cm、深さ25～30cmで、方形に近い掘形をもつものも認められる。

周溝は北辺以外の3辺に巡る。幅は20～30cm、最深部の深さは10cmである。

貯蔵穴と推定される小土坑を床面の南東隅で検出した。平面形は長径約90cm、短径約60cmの楕円形を呈し、深さは27cmである。埋土中から土師器片が若干出土している。北東隅の主柱穴と竈との間に、深さ20cmの不定形土坑がある。この土坑の西端は竈の焼土部分と近接しており、焼土範囲の外側に竈の袖部を想定すると、土坑と竈とが重複することになり、竪穴住居との共存はあり得ない。この土坑は竪穴埋土の掘削後に床面で検出されており、ＳＢ４に先行するものと考えられる。出土遺物はない。

竪穴住居の長辺である北壁の中央部に竈がある。竈体の大半は破壊・削平され、両袖基底部の痕跡と推定される粘土質の高まりがわずかに残存するのみである。直径約60cmの円形の焼土と、床面に立てられた3個の川原石が検出された。3個の石はともに床面上に約20cm露出している。2個の偏平な石は約60cmの距離を隔てて焼土の後方に立ち、それらのやや前方の焼土範囲内に円柱状のもう1つの石が直立している。この焼土内の石は竈の支石と推定される。後方の2個の石の形状はＳＢ１の竈にみられた袖石に酷似するが、両者の位置は相違する。ＳＢ１の袖石は竈の両袖先端部の内壁に貼付けられていたが、このＳＢ４の場合には、焼土および支石の後方に位置し、床面に立てられている。このような状況から、この2個の石は竈の構造材の一部と推定される。竈体基底部の芯材であろうか。竈からはミニチュアの杯(73)をはじめ多量の土師器片が出土した。

南西の主柱穴からの約80cm東の床面に、長径20cm、厚さ数cmの偏平な川原石が据えられている。上部の平坦面は他の部分よりも平滑で磨滅しており、明らかに使用の痕跡が認められる。作業台などの用途が考えられようか。なおＳＢ７でも同様な位置に、これに似た石を検出している。

須恵器杯蓋(75)は確実にＳＢ４に伴う。床面出土の完形品である。口径15.8cm、器高5.6cmを測る。天井部と口縁部の境界には凹線が認められ、口縁端面は内傾して端面と内・外面とを分ける稜線は明瞭である。陶邑のＴＫ10型式に併行すると考えられる。

ＳＢ５　調査区の北東部に位置し、ＳＢ4•6に隣接する。またＳＢ4～6の3棟の方向は一致し、ともに南北軸はN-22°-Wを示す。竪穴住居の西半が調査区外に及んでいるため、東西の規模は不明である。南北8.0mを測る方形で、調査区内最大の規模と推定される。検出面からの深さは17～22cmである。南西隅でＳＤ11と重複するが、切り合いは明瞭でＳＢ５の方が新しい。ＳＢ５の上層埋土である茶褐色砂

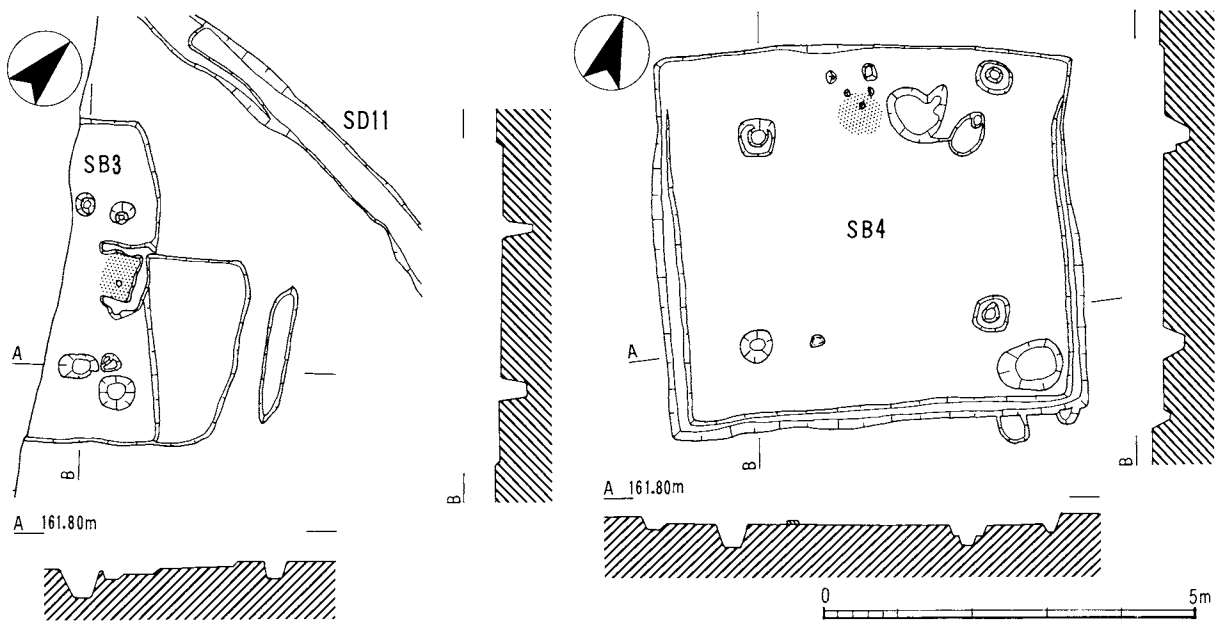


Fig.8　SB3•4実測図（1：100）

質土(炭・焼土含む)が、ＳＤ11の上層埋土の明茶褐色砂質土を切っている。なお竪穴埋土の下層には黒褐色砂質土が認められる。南北の柱間は5.1ｍと広く、主柱穴の規模は直径36～44cm、深さ43～48cmを測る。

周溝は南辺と西辺の大部分に巡るが、北西隅周辺で途切れ、北辺には認められない。このような周溝の在り方はＳＢ４に近似する。幅は20～30cm、深さは最深部で13cmを測る。

調査区東壁際に竪穴住居の南壁から若干張出した部分が認められる。検出の段階では重複する小土坑と考えられたが、竪穴住居との新旧関係は確認できなかった。また調査区東壁の土層観察においても、双方の切り合い関係を確定することはできなかった。竪穴埋土の掘削を終えた時点で、床面の一部にわずかながら段差が認められた。段差は南北方向に走り、その延長線は南壁の張出し部分に達する。これをＳＢ５に重複するもう１棟の竪穴住居の痕跡と考えることもできよう。南壁の張出し部分をこの竪穴住居の南西隅に想定すると、わずかに残る段差は床の痕跡と考えられる。

埋土中からかなり多くの遺物が出土したが、おおむね残存度の低い破片であり、伴出遺物と認め得るものはない。須恵器杯蓋(38～40) は陶邑のＴＫ10型式に近似する。須恵器杯身(41)はＴＫ 209～ＴＫ 217型式に併行すると考えられ、竪穴埋没の最終時期を示すものであろう。

ＳＢ６　ＳＢ５の南に位置し、竪穴住居の東の床面は調査区の東壁によって切られている。床面の中央部をＳＤ11が縦断するが、切り合いは明瞭でＳＢ６の方が新しい。ＳＢ６の埋土は、上層に灰褐色砂質土、下層に黒灰色砂質土が認められ、それらがＳＤ11の埋土を切っている。南東の主柱穴の位置から推定される竪穴住居の東西長は7.6ｍ前後である。南北長は 6.8ｍ、推定床面積は51.7㎡である。検出面からの深さは16cm前後である。平面形は方形で、そのコーナーは直角を呈する。柱間は東西5.4ｍ、南北4.2ｍを測る。主柱穴の規模は直径36～60cm、深さ35～62cmである。

床面の南東隅で貯蔵穴を検出した。東西に長い楕円形と推定され、南北長は約70cm、深さは20cm前後

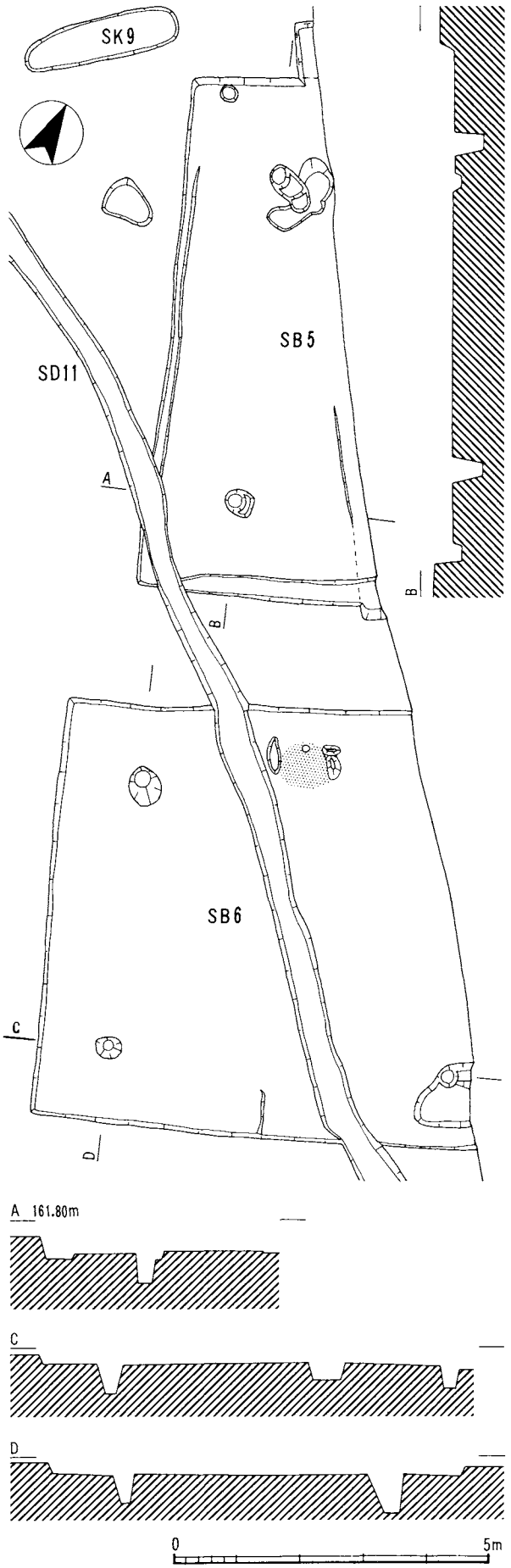


Fig.9　SB5･6実測図（1：100）

である。出土遺物には土師器杯(49)、土師器甕(42～44)がある。

竪穴住居の長辺である北壁に竈がある。両袖先端部がわずかに遺存する。両袖間の距離は約80cmで、その中央部に支石が直立した状態で検出された。支石は長さ33cm、直径約10cmの円柱状の川原石で、床面上に約20cm露出している。支石の周辺には竈の上部構造が崩落したと推定される焼土とともに、土師器甕(47)・甑(48)の破片が多数検出された。それらは竈に据えられたまま廃棄され、竈の崩壊とともに落下したものと推定される。竈内およびその周辺からは土師器甕(46)・ミニチュアの壺(51)・手捏ねの杯(52)・須恵器杯身（53・54）が出土している。

竈の天井部が崩落したと推定される焼土中、もしくはその下層から出土した土器群は、確実な伴出遺物と認定できよう。須恵器杯身（53・54）は陶邑のTK10型式に併行するものであろう。SB6の時期は6世紀中葉と考えられる。なお埋土中から土師器の把手付杯(50)と推定される破片が出土している。

隣接するSB5とSB6は多くの共通する属性を

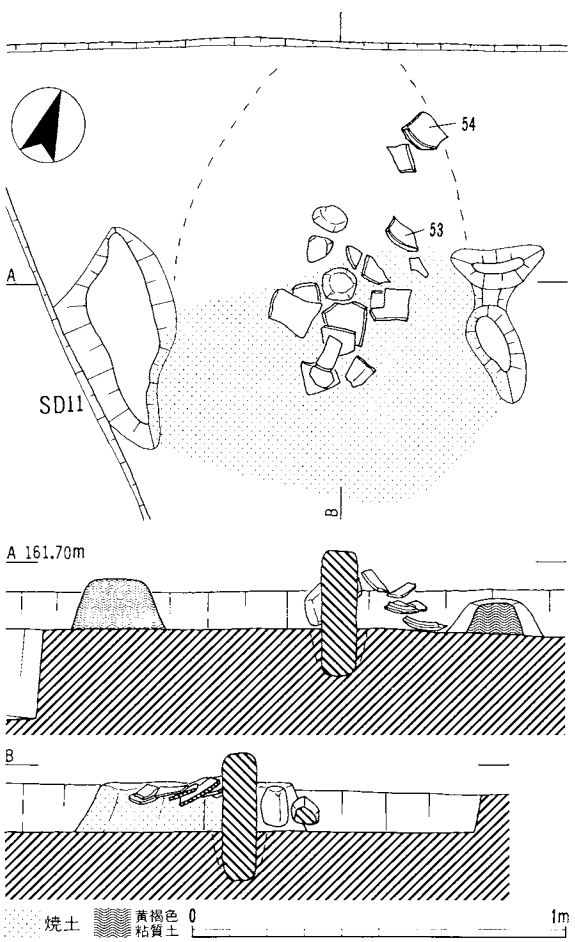


Fig.10　SB6竈実測図（1：20）

有する。建物方向は完全に一致し、ともに規模は大きく、床面隅の形状は直角を呈する。また柱間も広く上屋構造の類似性をも推測させる。差異は周溝の有無に関してのみ認められる。しかし両者の距離はわずか1.6mしか離れておらず、屋根構造や竈の煙出しの存在を考慮に入れると、とうてい共存していたとは考え難い。このような状況から、この2棟の竪穴住居を同一の単位集団によって建替えられたものと考えるのは恣意的に過ぎるであろうか。両者の出土遺物はともに陶邑のTK10型式に併行すると考えられるが、SB5の場合は竪穴の埋没過程で混入したものであり、SB6の場合は明らかな伴出遺物である。また同一の単位集団がごく近隣に住居を移す場合、土器の多くを廃棄して異動するとは考え難い。したがって両者の間には大きな時期差はないものの、SB5がSB6に先行すると考えられる。

SB7　調査区の中央部に位置する。建物方向は他の竪穴住居と著しく相違する。SB7の長軸方向はN-31°-Eを示す。平面形は東西4.4m、南北4.8mの方形を呈し、床面積は21.1㎡である。検出面からの深さは12～15cmである。主柱配置も特異である。4主柱穴から周壁までのそれぞれの距離には大きなばらつきが認められ、4主柱穴を結んでできる四角形は偏平な台形を呈する。主柱穴の規模は直径40～50cm、深さ13～18cmである。

床面の東隅に直径約60cm、深さ約20cmの円形の貯蔵穴を検出した。完形の土師器壺(59)が貯蔵穴の壁際に正立した状態で出土した。

竪穴住居の長辺である西壁の中央部に竈がある。SB7は竪穴住居の四隅がほぼ東・西・南・北を指す方向で存在しているため、竈は竪穴住居の中心から北西方向に位置することになる。したがって北竈という理解も許容されよう。両袖間の距離は約50cmを測る。直径約8cmの円柱状の支石が、竈の奥壁方向にやや傾いて立つ。焼土面上に27cm露出している。竈からは土師器甕(56•57）をはじめ、多くの土師器片が出土した。

南の主柱穴から約80cm北東の床面で、長径約20cm、厚さ約10cmの偏平な川原石を検出した。上部の平坦面は他の部分よりも平滑で磨滅しており、明らかに使用の痕跡が認められる。SB4でも主柱穴のそば

に同様な石を検出したが、据えられていた位置、石の形状などの点で両者はきわめて酷似している。この石と主柱をもとに使用したなんらかの作業が行われたのであろうか。また竪穴住居の東壁に近い床面には、長径約50cm、短径約24cm、厚さ約20cmの石が据えられている。これも上面は磨滅して平滑である。出入口の踏石の可能性はないだろうか。

伴出遺物と認められるものは前述の3点（56・57・59）のみである。図示した須恵器もおおむね残存度は低く、すべて埋土中から出土したものである。須恵器杯身(67)は偏平で、立上がりも短く内傾の度合いも大きい。陶邑のTK43型式に併行すると考えられる。その他の須恵器は、陶邑TK10型式に近似する。

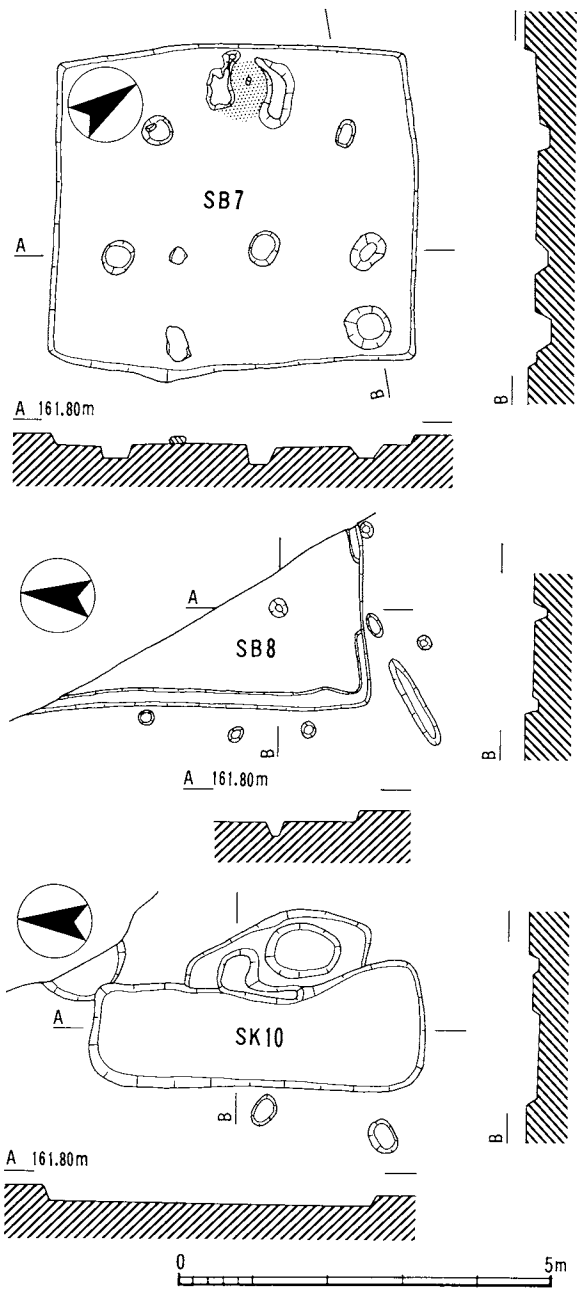


Fig.11　SB7・8,SK10実測図（1：100）

SB8　調査区の南東隅に位置する。西壁と南壁の一部が確認できるのみで、竪穴住居の大部分は調査区外に及んでいるため全容は不明である。竪穴埋土の上層には暗褐色砂質土、下層には暗灰褐色砂質土が認められる。西壁から約 1.3m、南壁から約 1.1mの位置にあるピットが主柱穴と考えられる。その規模は直径24cm、深さ18cmである

周溝は南辺の一部と西辺に巡る。南辺では約90cmの範囲にわたって周溝の途切れる部分が認められる。周溝の幅は10～15cm、深さは5cm程度である。

出土遺物にはかなり磨滅した土師器片が少量あるのみで、時期を推定し得る資料は皆無である。

SK10　調査区の南東端に位置する。平面形は南北に長い隅丸長方形を呈し、長辺 4.5m、短辺 1.3～1.6mを測る。深さは15～20cmで、底は平坦である。東側で不定形土坑と重複するが、切り合い関係からSK10の方が新しいと考えられる。双方ともにその性格は不明である。

出土遺物には瓦器（78～80）と若干の土師器片がある。瓦器椀(79)はやや歪みが認められるが、推定口径15.8cmである。口縁内面の沈線は端部に施される。口縁部外面は強くヨコナデされ、外面のヘラミガキは疎らで、内面は密である。これは山田編年[36]の第Ⅱ段階第3型式に属するものであり、12世紀の第3四半期の所産と考えられる。

SD11　調査区の東から西に向かって大きな弧を描いて走る。肩幅は50～80cm、底幅は35～50cm、深さは30～40cmである。底は平坦で、断面は逆台形を呈する。溝底の高さは西端と東端とで約20cmの差があり、東から西に向かって漸次低くなる。調査区の北側を西に向かって流れる柘植川に注いでいたものと推定される。調査区の西端でSB5・6と重複するが、切り合い関係からこの2棟の竪穴住居より明らかに古い。SB5・6はともに6世紀中葉に属すると考えられる。溝の埋土の下層には黒褐色砂質土、上層には厚さ数cmの明茶褐色砂質土が認められる。

出土遺物は土師器片と数点の縄文土器片のみで、時期を推定し得る資料はない。

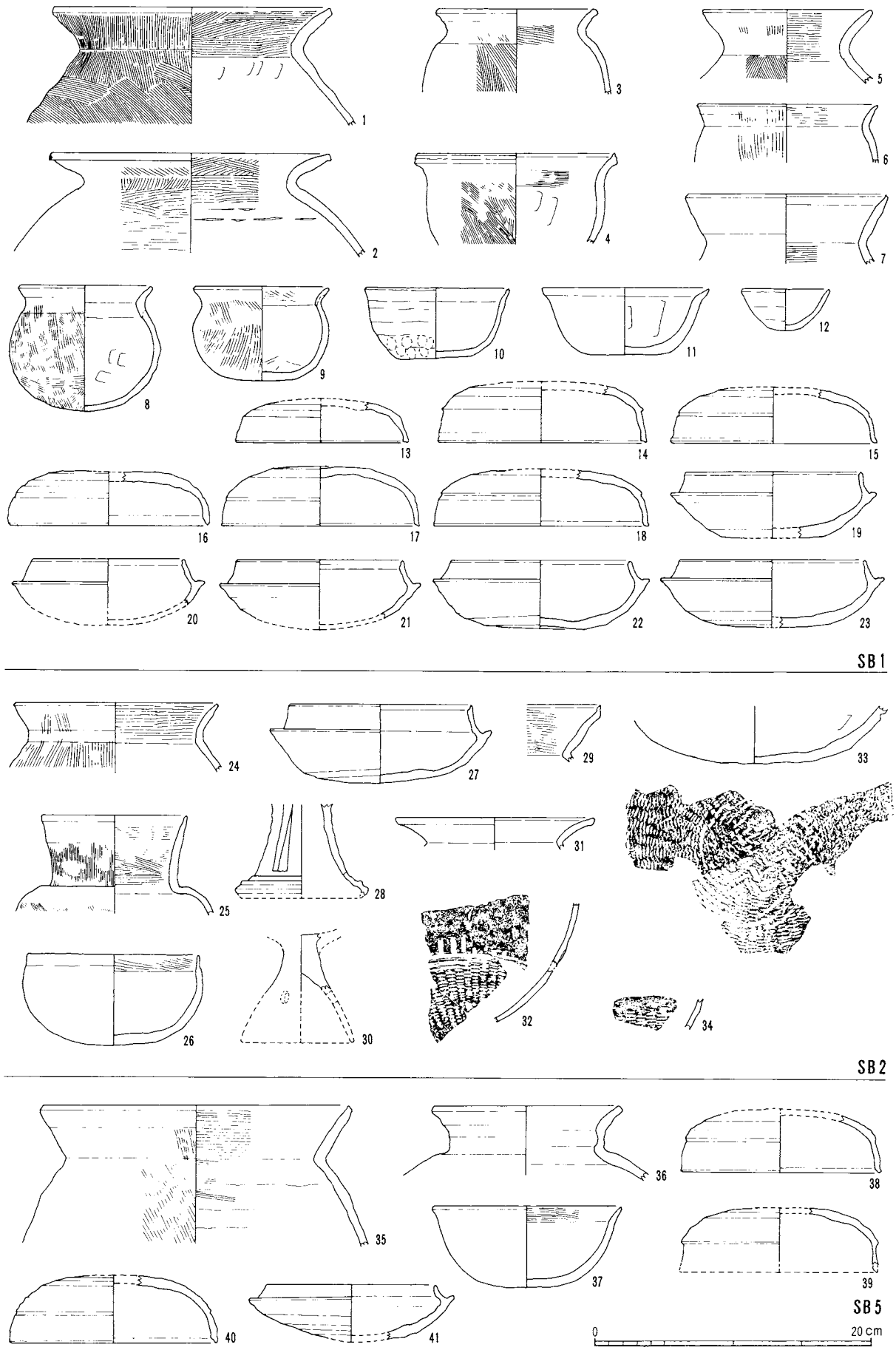


Fig.12　出土土器実測図 (1) (1 : 4)

報告番号	整理番号	器種	出土位置	口径(cm)	器高(cm)	製作・調整技法	胎土	色調	残存度	備考
1	21	土師器 甕	SB1 北東隅貯蔵穴	20.0	−	外：ハケメのちヨコナデ 内：板ナデのちハケメのちヨコナデ	密 1～2mmの小石と雲母	外:橙褐色 内:灰褐色	口縁全残	
2	34	〃 〃	〃 竈の東床面	20.2	−	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデのちハケメのちヨコナデ	密 ～2mmの小石	明橙褐色	2/3	
3	36	〃 〃	〃 竈内部	11.4	−	外：ハケメのちヨコナデ 内：ハケメのちヨコナデ	密 1～4mmの小石	暗黄褐色	1/3	
4	86	〃 〃	〃 埋土上層	14.3	−	外：ハケメのちヨコナデ 内：板ナデのちハケメのちヨコナデ	密 1～2mmの小石と雲母	暗黄褐色	1/8	
5	90	〃 〃	〃 埋土中	12.2	−	外：ハケメのちヨコナデ 内：ハケメのちヨコナデ	密 ～1mmの小石	淡黄褐色	1/7	
6	93	〃 〃	〃 北東隅貯蔵穴	13.0	−	外：ハケメのちヨコナデ 内：ハケメのちヨコナデ	粗 ～1mmの小石と雲母	外:淡黄褐色 内:暗褐色	1/5	外面磨耗
7	85	〃 〃	〃 埋土上層	14.3	−	外：ヨコナデ 内：ハケメのちヨコナデ	粗 1～3mmの小石と雲母	外:褐色 内:黄褐色	1/7	口縁外面スス
8	16	〃 〃	〃 床面	9.6	9.0	外：ハケメのちヨコナデ 内：板ナデのちハケメのちヨコナデ	密 1～2mmの小石と雲母	暗褐色	完形	頸部内面炭化物 胴部外面スス
9	9	〃 〃	〃 竈内下層	9.8	6.8	外：ハケメのちヨコナデ 内：板ナデのちヘケメのちヨコナデ	粗 ～1mmの小石と雲母	暗褐色	完形	外面スス
10	14	〃 杯	〃 床面	10.4	5.1	外：指オサエのちヨコナデ，ツギメ 内：ナデのちハケメのちヨコナデ	密 1～3mmの小石と雲母	暗黄褐色	完形	口縁内面炭化物
11	84	〃 〃	〃 埋土上層	12.0	4.8	外：指オサエ・ナデのちヨコナデ 内：ヨコナデ	密 0.5～1mmの小石と雲母	赤褐色	1/4	
12	83	〃 ミニチュア杯	〃 竈内部	6.4	3.1	外：指オサエのちヨコナデ，ツギメ 内：ヨコナデ	密 ～0.5mmの小石と雲母	暗黄褐色	1/4	
13	64	須恵器 杯蓋	〃 埋土中	12.4	3.1	外：回転ナデのち回転ケズリ 内：回転ナデ	密 ～0.5mmの小石	青灰色	1/10	
14	38	〃 〃	〃 埋土下層	15.2	4.4	外：回転ナデのち回転ケズリ 内：回転ナデ	密 ～2mmの小石	暗青灰色	1/6	
15	19	〃 〃	〃 床面	15.0	4.0	外：回転ナデのち回転ケズリ 内：回転ナデ	密 ～1mmの小石	青灰色	1/3	
16	12	〃 〃	〃 埋土中	14.6	3.8	外：回転ナデのち回転ケズリ 内：回転ナデ	密 ～0.5mmの小石	青灰色	1/2	
17	89	〃 〃	〃 〃	14.4	4.2	外：回転ナデのち回転ケズリ 内：回転ナデ	密 ～1mmの小石	青灰色	1/15	
18	88	〃 〃	〃 埋土下層	14.6	4.1	外：回転ナデのち回転ケズリ 内：回転ナデ	密 0.5～5mmの小石	暗青灰色	1/4	
19	94	〃 杯身	〃 北東隅貯蔵穴	12.6	4.7	外：回転ナデのち回転ケズリ 内：回転ナデ	密 1～2mmの小石と雲母	外:暗青灰色 内:淡褐色	1/5	焼成不良
20	66	〃 〃	〃 埋土中	12.4	3.9	外：回転ナデ 内：回転ナデ	密 ～0.5mmの小石	暗青灰色	1/11	
21	20	〃 〃	〃 埋土下層	12.0	5.0	外：回転ナデのち回転ケズリ 内：回転ナデ	密 ～1mmの小石と雲母	暗灰色	1/4	底部外面自然釉
22	15	〃 〃	〃 〃	13.0	4.9	外：回転ナデのち回転ケズリ 内：回転ナデ	密 ～2mmの小石	外:青灰色 内:淡褐色	完形	焼成不良
23	65	〃 〃	〃 北東隅貯蔵穴	13.4	4.9	外：回転ナデのち回転ケズリ 内：回転ナデ	密 ～2mmの小石と雲母	外:灰黒色 内:淡褐色	1/2	焼成不良
24	127	土師器 甕	SB2 南東隅貯蔵穴	14.8	−	外：ハケメのちヨコナデ 内：ハケメのちヨコナデ	密 1～2mmの小石	橙褐色	1/4	頸部内面炭化物
25	17	〃 壺	〃 〃	10.4	−	外：ハケメのちヨコナデ 内：ハケメのちヨコナデ	密 ～1mmの小石と雲母	黄褐色	1/2	外面磨耗
26	7	〃 杯	〃 埋土下層	12.4	−	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちハケメのちヨコナデ	粗 ～2mmの小石と雲母	暗褐色	2/3	外面剥離
27	11	須恵器 杯身	〃 ピット	13.2	5.6	外：回転ナデのち回転ケズリ 内：回転ナデ	密 雲母	暗青灰色	完形	底部外面に自然釉,歪みあり
28	40	〃 高杯	〃 南東隅貯蔵穴	−	−	外：回転ナデ 内：回転ナデ	密 ～0.5mmの小石	灰黒色	脚部径の1/4	外面自然釉 方形3方透し
29	70	土師器 甕	〃 埋土中	11.4	−	外：ヨコナデ 内：ハケメのちヨコナデ	密 ～2mmの小石と雲母	外:暗褐色 内:黄褐色	1/12	
30	74	〃 高杯	〃 〃	−	−	外：ナデ 内：ヘラケズリ	密 ～0.5mmの小石	淡黄褐色	脚部上半	
31	97	〃 甕	〃 主柱穴	14.2	−	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密 ～0.5mmの小石と雲母	外:紫褐色 内:暗褐色	1/4	No.32と同一個体
32	103	〃 〃	〃 主柱穴,ピット 埋土下層	−	−	外：カゴメ圧痕 内：ヨコナデ	密 ～0.5mmの小石と雲母	外:紫褐色 内:暗褐色	—	No.31と同一個体
33	117	〃 −	〃 主柱穴	−	−	外：カゴメ圧痕 内：ヘラケズリのちナデ	密 ～1mmの小石と雲母	明黄褐色	—	外面黒斑
34	118	〃 −	〃 周溝	−	−	外：カゴメ圧痕 内：ナデ	密 ～1mmの小石と雲母	黄褐色	—	内外面磨耗
35	51	〃 甕	SB5 埋土中	22.2	−	外：ハケメのちヨコナデ 内：ハケメのちヨコナデ	粗 1～3mmの小石と雲母	淡黄褐色	1/9	内外面磨耗
36	46	〃 〃	〃 〃	13.4	−	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密 ～1mmの小石	橙褐色	1/3	
37	82	〃 杯	〃 〃	13.6	5.9	外：指オサエ・ナデのちヨコナデ 内：ハケメのちヨコナデ	密 0.5～2mmの小石	淡黄褐色	1/4	
38	62	須恵器 杯蓋	〃 〃	14.2	4.6	外：回転ナデのちヨコナデ 内：回転ナデ	密 1～2mmの小石	外:灰黒色 内:青灰色	1/3	

Tab.3　出土土器観察表(1)

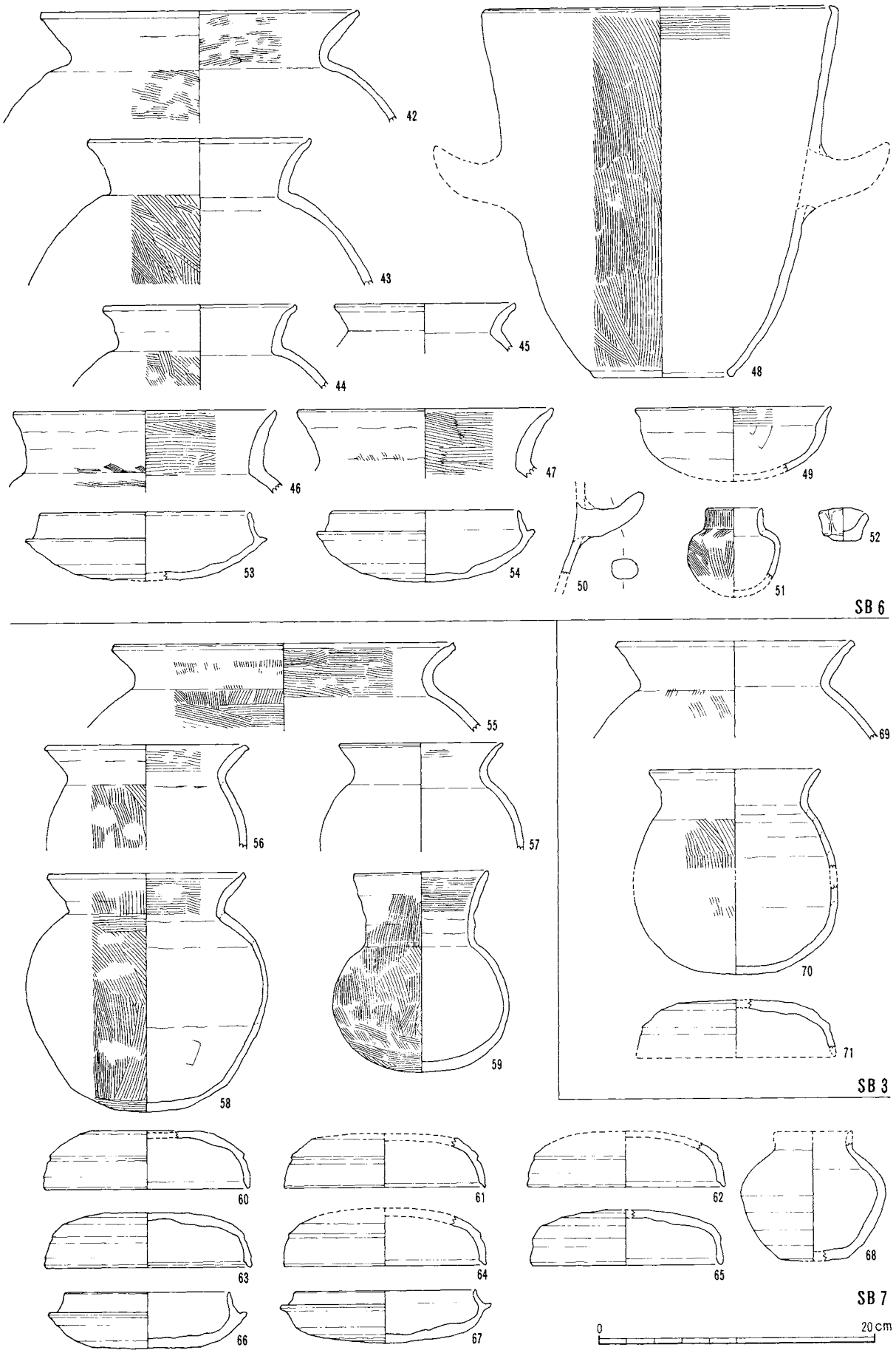


Fig.13　出土土器実測図(2)(1：4)

報告番号	整理番号	器種	出土位置	口径(cm)	器高(cm)	製作・調整技法	胎土	色調	残存度	備考
39	68	須恵器 杯蓋	SB5 埋土中	14.0	4.5	外：回転ナデのち回転ケズリ 内：回転ナデ	密 1～2mmの小石	灰色	体 1/4 部	
40	32	〃 〃	〃 〃	15.2	4.9	外：回転ナデのち回転ケズリ 内：回転ナデ	密 ～1mmの小石	灰色	1/6	
41	39	〃 杯身	〃 〃	12.2	4.1	外：回転ナデのち回転ケズリ 内：回転ナデ	密 1～4mmの小石	青灰色	3/4	歪みあり
42	81	土師器 甕	SB6 埋土中 貯蔵穴	23.0	—	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデ・ハケメのちヨコナデ	密 1～3mmの小石	淡黄褐色	1/2	内外面磨耗
43	95	〃 〃	〃 〃 〃	16.0	—	外：ハケメのちヨコナデ 内：板ナデのちヨコナデ,ツギメ	密 ～2mmの小石と雲母	暗黄褐色	7/8	頸部内面炭化物
44	87	〃 〃	〃 貯蔵穴	13.8	—	外：ハケメのちヨコナデ 内：板ナデのちヨコナデ	密 雲母	暗褐色	1/3	
45	76	〃 〃	〃 埋土中	12.9	—	外：ヨコナデ 内：ヘラケズリのちヨコナデ	粗 1～5mmの小石	淡褐色	1/4	外面スス 内面剝離
46	23	〃 〃	〃 竈付近	19.2	—	外：ハケメのちヨコナデ 内：板ナデのちハケメのちヨコナデ	密 ～0.5mmの小石と雲母	橙褐色	2/3	
47	55	〃 〃	〃 竈内部	18.6	—	外：ハケメのちヨコナデ 内：ハケメのちヨコナデ	密 1～2mmの小石と雲母	黄褐色	1/4	
48	96	〃 甑	〃 〃	25.0	26.8	外：ハケメのちヨコナデ 内：ハケメのちヨコナデ	密 1～5mmの小石と雲母	暗黄褐色	1/2	胴部外面スス
49	78	〃 杯	〃 貯蔵穴	14.0	5.3	外：ヨコナデ，ツギメ 内：板ナデのちハケメのちヨコナデ	密 ～2mmの小石	淡褐色	1/3	口縁内外面スス
50	75	〃 把手付杯	〃 埋土中	—	—	外：指オサエ，ナデ 内：ナデ	密 1～4mmの小石	橙褐色	把手全残	
51	13	〃 ミニチュア壺	〃 竈付近	4.0	6.5	外：ハケメのちヨコナデ 内：ヨコナデ，ツギメ	密 ～1mmの小石	黄褐色	口縁全残	
52	54	〃 手捏ね杯	〃 竈内部	3.1～3.3	2.5	外：指オサエ 内：指オサエのちヨコナデ 底：ナデ	密 雲母	暗黄褐色	完形	
53	41	須恵器 杯身	〃 〃	15.2	4.9	外：回転ナデのち回転ケズリ 内：回転ナデ	密 ～0.5mmの小石と雲母	暗青灰色	1/3	
54	35	〃 〃	〃 〃	13.6	5.2	外：回転ナデのち回転ケズリ 内：回転ナデ	密 ～1mmの小石	暗灰色	1/3	
55	77	土師器 甕	SB7 埋土中	24.6	—	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデ・ハケメのちヨコナデ	密 ～2mmの小石と雲母	黄褐色	1/2	口縁内外面スス
56	79	〃 〃	〃 竈内部	14.4	—	外：ハケメのちヨコナデ 内：ハケメのちヨコナデ	粗 ～2mmの小石と雲母	外:暗赤褐色 内:暗褐色	1/7	外面磨耗
57	126	〃 〃	〃 〃	11.8	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密 0.5～3mmの小石と雲母	橙褐色	1/8	内外面磨耗
58	98	〃 〃	〃 埋土中	14.2	17.1	外：ハケメのちヨコナデ 内：ハケメのちヨコナデ	密 ～1mmの小石	淡黄褐色	2/3	胴部スス
59	8	〃 壺	〃 貯蔵穴	9.8	14.4	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデのちハケメのちヨコナデ,ツギメ	密 1～4mmの小石	黄褐色	完形	底部外面スス
60	24	須恵器 杯蓋	〃 埋土中	15.0	4.2	外：回転ナデのち回転ケズリ 内：回転ナデ	密 ～1mmの小石	灰黒色	1/3	
61	73	〃 〃	〃 〃	14.6	4.0	外：回転ナデのち回転ケズリ 内：回転ナデ	密 ～2mmの小石	灰色	1/15	
62	26	〃 〃	〃 〃	14.4	4.1	外：回転ナデ 内：回転ナデ	密 ～0.5mmの小石	灰色	1/5	
63	57	〃 〃	〃 〃	15.0	3.9	外：回転ナデのち回転ケズリ 内：回転ナデ	密 ～0.5mmの小石	暗灰色	1/11	
64	71	〃 〃	〃 〃	14.6	4.2	外：回転ナデのち回転ケズリ 内：回転ナデ	密 ～3mmの小石	灰色	1/12	
65	27	〃 〃	〃 〃	14.0	4.0	外：回転ナデのち回転ケズリ 内：回転ナデ	密 ～2mmの小石	暗灰色	1/10	
66	58	〃 杯身	〃 〃	12.0	4.0	外：回転ナデのち回転ケズリ 内：回転ナデ	密 1～2mmの小石	淡灰色	1/2	
67	59	〃 〃	〃 〃	13.1	3.8	外：回転ナデのち回転ケズリ 内：回転ナデ	密 ～1mmの小石	淡灰色	1/7	
68	80	〃 短頸壺	〃 〃	5.6	9.4	外：回転ナデのち回転ケズリ 内：回転ナデ	密 ～0.5mmの小石と雲母	明褐色	胴 2/3 部	焼成不良
69	33	土師器 甕	SB3 主柱穴	17.0	—	外：ハケメのちヨコナデ 内：ヨコナデ	粗 1～6mmの小石	橙褐色	1/3	内外面磨耗
70	52	〃 〃	〃 貯蔵穴	12.2	14.9	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ,ツギメ	粗 1～5mmの小石と雲母	外:赤褐色 内:暗褐色	1/3	外面磨耗
71	29	須恵器 杯蓋	〃 〃	14.6	4.2	外：回転ナデのち回転ケズリ 内：回転ナデ	密 1～2mmの小石	灰色	体 1/3 部	天井部外面 ヘラガキ1条
72	53	土師器 甕	SB4 埋土中	13.8	—	外：ハケメのちヨコナデ 内：板ナデのちハケメのちヨコナデ	密 1～2mmの小石と雲母	外:淡褐色 内:暗褐色	頸 1/3 部	外面磨耗 胴部外面スス
73	18	〃 ミニチュア杯	〃 竈付近	6.6	3.3	外：指オサエ・ナデ，ツギメ 内：指オサエ・ナデ，ツギメ	密 ～2mmの小石と雲母	暗赤褐色	1/2	
74	48	須恵器 甕	〃 埋土中	21.6	—	外：回転ナデ 内：回転ナデ	密 1～2mmの小石	黒灰色	1/15	外面自然釉
75	10	〃 杯蓋	〃 床面	15.8	5.6	外：回転ナデのち回転ケズリ 内：回転ナデ	密 1～2mmの小石と雲母	淡灰色	完形	外面自然釉
76	31	〃 〃	〃 埋土上層	14.8	4.2	外：回転ナデのち回転ケズリ 内：回転ナデ	密 ～0.5mmの小石	灰色	1/6	

Tab.4　出土土器観察表 (2)

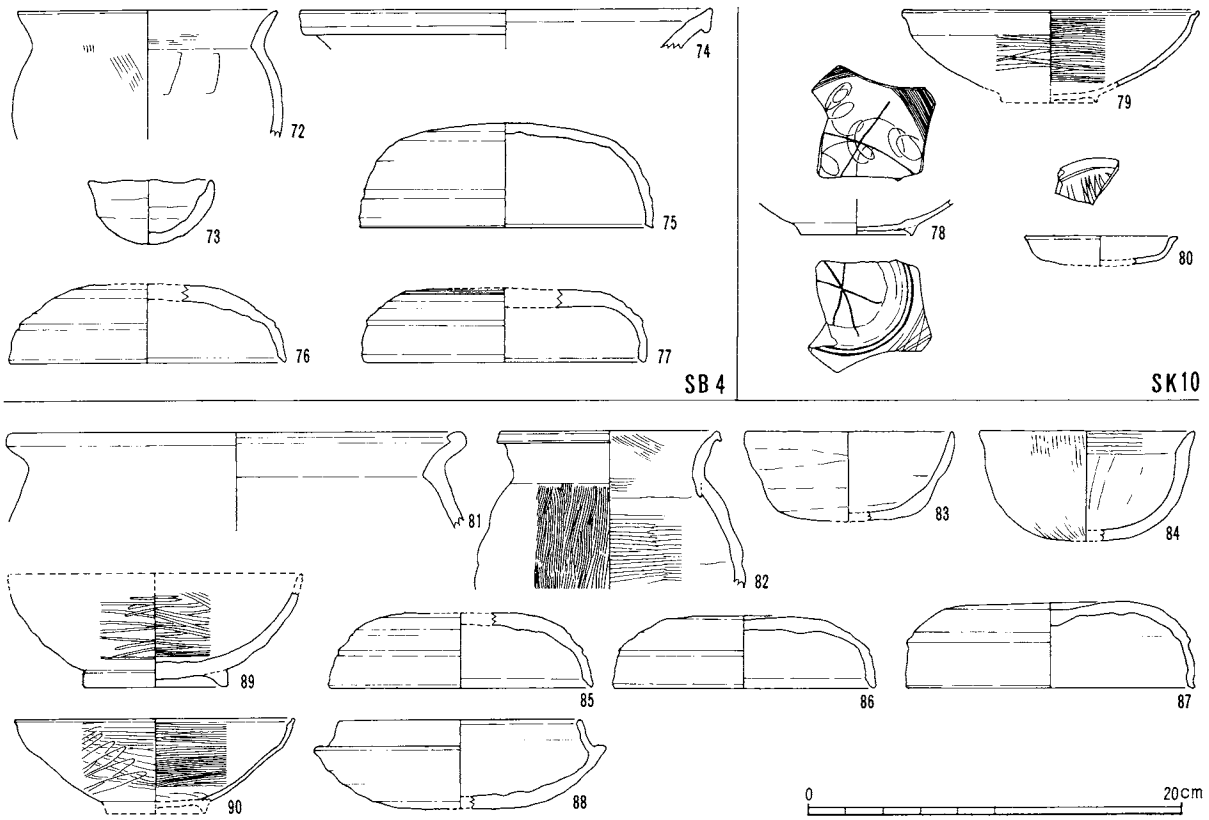


Fig.14　出土土器実測図(3)(1：4)

報告番号	整理番号	器種	出土位置	口径(cm)	器高(cm)	製作・調整技法	胎土	色調	残存度	備考
77	56	須恵器　杯蓋	SB4　埋土中	14.6	4.0	外：回転ナデのち回転ケズリのちカキメ 内：回転ナデ	密 ～1mmの小石	外:灰黒色 内:青灰色	1/7	
78	42	瓦器　椀	SK10　〃	高台6.0	—	外：指オサエ・ヨコナデのちヘラミガキ 内：ヨコナデのちヘラミガキ	密	灰黒色	高台1/3	
79	44	〃　〃	〃　〃	15.8	5.0	外：指オサエ・ヨコナデのちヘラミガキ 内：ヨコナデのちヘラミガキ	密 雲母	灰黒色	1/2	歪みあり
80	43	〃　皿	〃　〃	8.2	1.6	外：指オサエ・ヨコナデ 内：ヨコナデのちヘラミガキ	密	灰黒色	1/7	
81	3	土師器　羽釜	包含層　E－5	24.0	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗 0.5～5mmの小石と雲母	外:黄褐色 内:暗褐色	1/6	
82	50	〃　〃	〃　E－10	11.6	—	外：ハケメのちヨコナデ 内：ハケメのちヨコナデ	密 ～1mmの小石と雲母	外:淡褐色 内:黒褐色	1/3	
83	5	〃　杯	〃　E－15	11.0	4.7	外：指オサエのちヨコナデ,ツギメ 内：ヨコナデ	密 雲母	外:灰褐色 内:黄褐色	1/2	口縁外面スス
84	47	〃　〃	〃　B－6	11.4	5.8	外：ハケメのちヨコナデ 内：板ナデのちハケメのちヨコナデ	密 ～2mmの小石	橙褐色	1/4	
85	60	須恵器　杯蓋	〃　E－11	14.0	4.0	外：回転ナデのち回転ケズリ 内：回転ナデ	密 1～2mmの小石	暗青灰色	1/9	
86	25	〃　〃	〃　B－12	14.2	3.8	外：回転ナデのち回転ケズリ 内：回転ナデ	密 0.5～3mmの小石	灰色	1/9	
87	6	〃　〃	〃　E－15	15.4	4.5	外：回転ナデのち回転ケズリ 内：回転ナデ	密 1～3mmの小石	青灰色	1/2	口縁外面自然釉,歪みあり
88	28	〃　杯身	〃　E－9	13.0	4.8	外：回転ナデのち回転ケズリ 内：回転ナデ	密 ～0.5mmの小石	暗青灰色	1/6	
89	22	黒色土器　椀	〃　B－16	高台7.8	—	外：指オサエのちヨコナデのちヘラミガキ 内：ヨコナデのちヘラミガキ	密 雲母	黒色	高台全残	
90	2	瓦器　〃	〃　E－15	15.0	—	外：指オサエのちヨコナデのちヘラミガキ 内：ヨコナデのちヘラミガキ	密	灰黒色	1/3	

Tab.5　出土土器観察表(3)

凡例

1　ミニチュア；各種の通常サイズの土器を祖形とし、それを小形化した物をいう。したがって通常の土器の製作技法が用いられる。

2　手捏ね；粗製小形土器で祖形を特定できない。通常の土器の製作技法を用いず、掌上で粘土を捏ねて製作された土器をいう。

3　板ナデ；「原体の幅、使用箇所、用法はハケと類似しながらも、ハケが多数の細線を持つのに対し、それを持たぬものを言う」という『纒向』の概念規定に従った。また成形技法としてのヘラケズリとも区別し、器面を平滑にするための、調整技法としての板状具よるナデをいう。

4　ツギメ；粘土紐の巻上げと輪積みの峻別が困難である点から、両者の痕跡を総称してツギメと表記した。

3　包含層出土遺物

古墳時代をはじめ、縄文時代後期や弥生時代中期、平安時代後期の土器が少量出土した。

縄文土器　いずれも後期に属するが、前葉(97～99)や中葉の例(91)、末葉らしい例(93)も含み、3小期に分類される。全般的に調査区北部に集中する傾向が窺える。

緩い波状口縁の例(91)は直線的にやや開き、薄手である。内外は横位にヨコナデされている結果、内面上端は沈線状を呈している。口縁部上端から0.5～3.5cmほどの範囲に、強い撚りの、細い単節縄文を施して地文としている。縄文地文帯よりもやや下にまで沈線が5本以上水平に巡らされている。また、この沈線文帯と重なって波状口縁に沿った4本の沈線文帯も配される。いずれの沈線も、波頂部の下で縦位に施された円形刺突文を起点として左右に延びている。黄土色を呈し、石英などの細砂粒を含む。口縁部外面にはナデの後に、内面にはハケメの後に

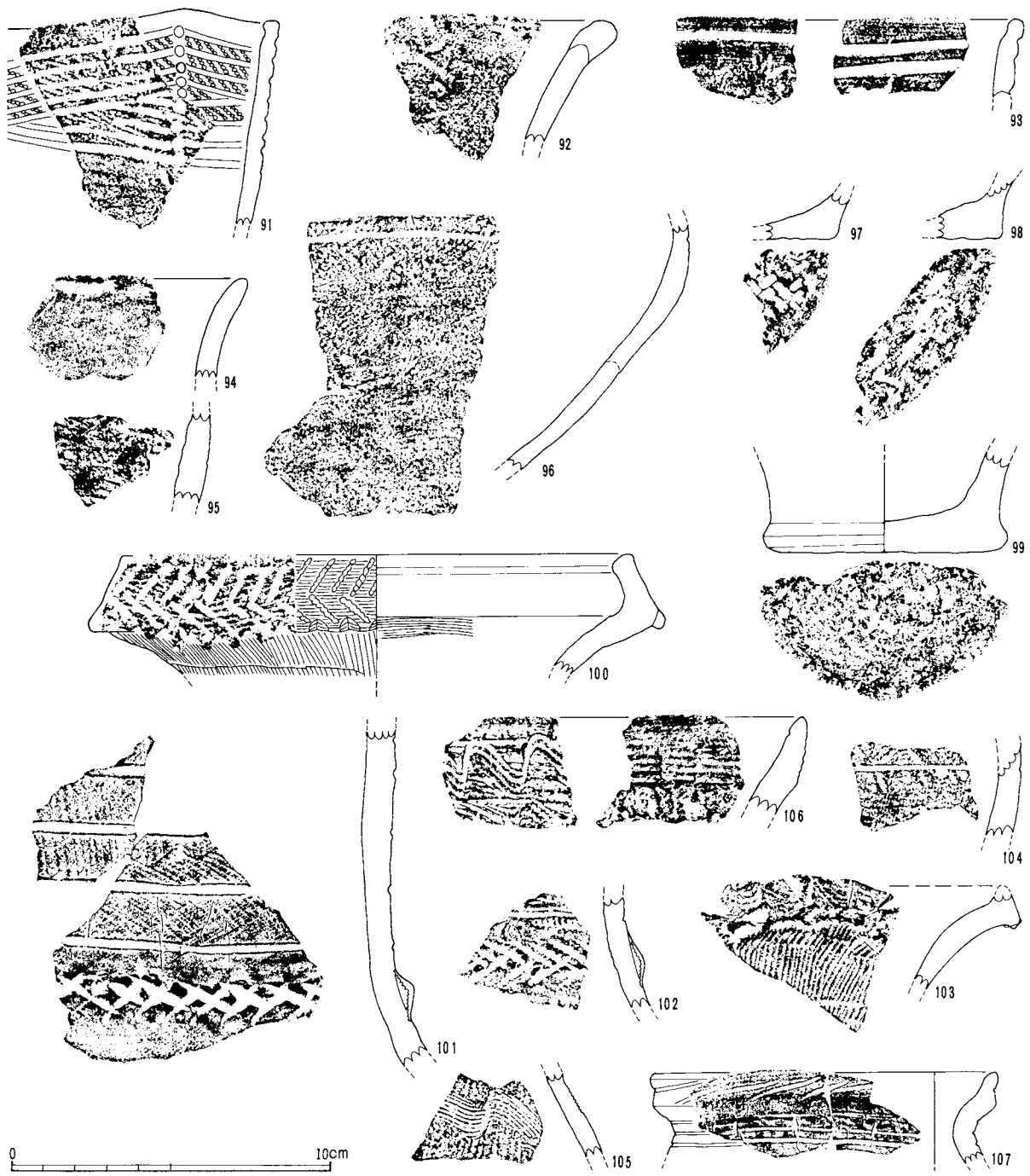


Fig.15　出土土器実測図(4)(1：2)

やや幅広い沈線を施す例(93)もある。他とは異なり黒色を呈する。無文の口縁部片は2例（92・94）ある。ともにゆるく外反し、端部は丸味を持つ。前者(92)はやや肥厚し粘土のツギメが認められる。体部片には縄文施文例(95)やヘラ描沈線文を残す例(96)などがある。底部には大小の網代痕を明瞭に残す例(97・98）と、不確実な例(99)とがある。

弥生土器　壺(100～105)と甕(106・107)とが少量認められる。いずれも中期中葉の所産であろう。

受口の広口壺(100～102)は外面をハケ調整した後、やや内斜する受口部にクシ状具による羽状刺突文とキザミを施す。直立する頸部には、やや間隔をおいてヘラ描沈線文を幾条か配する。頸・体部境には、断面が低い三角形の凸帯を貼付する。この凸帯にヘラ状具で「×」状に刻む例(101）や、クシ状具で羽状に刺突文を配する例(102）とがある。口縁部が外反する壺(103）は、端部を上下にやや拡張し、この下端をクシ状具で刻む。体部片には、ヘラ描横線より上に縄文を持つ例(104）、クシ描波状文を施す例(105）などが認められる。

甕(106・107)は強弱の差はあるが、ともに受口状を呈する。前者(106）は口縁外面にゆるく面取りしてわずかに受口にしている。内外にヨコハケを施し、内面には波状文を持つ。後者(107）は典型的な受口の例である。内面にはナデ、外面には粗いハケ調整を施す。

古墳時代　竪穴住居出土土器と基本的に変わらない土師器や須恵器が出土している。後期に属する7例を図示した。

土師器は甕と杯である。小形甕(82)は比較的よく立ち上がる口縁部の端部を下にやや拡張する。口縁部内面の一部と体部内外にハケメを残す。杯は粘土のツギメを残す例(83)と、口縁部内面に面取りし、ヘラのアタリを持つ例(84)とがある。

須恵器は杯の身と蓋である。蓋(85 ～87）は、口縁端部の面をわずかに残し、肩部には浅い沈線か段を持つ。口径は14～15.5cmほどである。

平安時代　土師器の羽釜らしい口縁部片(81)は、端部が内側に短く折り返される。黒色土器B類[37]の椀(89)は丸味のある体部に厚い高台を持ち、内外にヘラミガキを施す。瓦器椀(90)は外面にもヘラミガキを施し、底部内面に連結輪状文を残す。

報告番号	整理番号	器種	出土位置		法量(cm)	特徴	胎土	焼成	色調	備考
91	4	縄文土器　深鉢	包含層	B－3	－	波状口縁,口縁部縄文地 波頂下に刺突,沈線文帯	細砂多	良	黄土色	北白川上層Ⅲ式の新しい部分に類似
92	112	〃　〃	〃	D－8	－	やや肥厚する丸棒状口縁 内面はヨコハケ後,ナデ,ツギメ	微砂	〃	暗褐色	
93	113	〃　〃	〃	E－5	－	内外に凹線文	精良	〃	黒色	後期末葉
94	117	〃　〃	SB6	D－8	－	外反する剣先状口縁 内外共ヨコヘラミガキ	〃	〃	暗黄褐色	
95	101	〃　〃	SB4	B－6	－	外面に単節斜縄文 内面不調整	小石多	〃	〃	
96	114	〃　〃	包含層	E－5	－	腰に1条沈線，単節斜縄文 腰部のみ赤色顔料	精良	〃	暗茶褐色	後期前葉か
97	100	〃　〃	SD11	E－8	底径 6.8	網代痕明瞭	〃	〃	淡赤褐色	後期前葉
98	99	〃　〃	包含層	D－6	〃 13.8	網代痕	小石多	やや不良	黄褐色	〃
99	108	〃　〃	SK9	D－5	〃 6.9	かすかに網代痕か 体部ナデ,ヘラのアタリ	細砂	良	赤褐色	〃
100	1	弥生土器　受口壺	包含層	B－12	口径 16.1	外面ハケ調整，口縁部外面に クシメ羽状文，口縁下端部に刻目	小石多	〃	黄土色	中期中葉
101	107	〃　広口壺	〃	B－14	－	頸部凸帯上にヘラ刻文，ハケ調整 後に太い沈線，内面ナデとハケ	砂粒	〃	淡茶褐色	〃
102	111	〃　〃	－	表採	－	頸部凸帯上にクシメ，ハケ調整 後に沈線，内面ハケメ	砂粒少	〃	淡黄褐色	〃
103	121	〃　壺	包含層	B－12	－	外面ハケ，内面ナデ調整 口縁下端にハケ状具による刻目	精良	〃	黄褐色	〃
104	109	〃　〃	SB7	B－12	－	横位ハラミガキ後に1条の細い 沈線,この上方には単節Lの斜縄文	砂粒	〃	淡褐色	〃
105	104	〃　〃	SB6	D－9	－	1帯のクシ描波状文 内面はナデ	精良	〃	淡黄褐色	〃
106	120	〃　受口壺	包含層	D－9	－	内外にヨコハケ 内面にクシ描波状文	〃	〃	乳黄褐色	〃
107	119	〃　〃	SB5	D－7	口径 10.7	外面に粗いヨコハケ 内面はナデ	雲母多	〃	暗黄褐色	〃

Tab.6　出土土器観察表(4)

Ⅳ 結　語

1　遺構について

南北に長い調査区はその北半と南半とで大きく様相を異にする。竪穴住居の多くは北半に集中し、南半では土坑やピットがそれに替る。また包含層出土遺物についても、古墳時代以前のものはほとんどが北半から、中世以降のものはすべて南半から出土している。試掘調査の結果からも、この6世紀の竪穴住居で構成される集落は、南方向へ広がっている可能性は少なく、柘植川に沿って台地北縁部に東西方向に展開していたものと推測される。

時期を推定し得る遺物が出土しなかったＳＢ８を除く他の７棟の竪穴住居について、６世紀前葉（ＳＢ２）→６世紀中葉（ＳＢ１・４～７）→６世紀後葉（ＳＢ３）という、３段階の変遷が考えられる。６世紀中葉に属する５棟のうち、ＳＢ７は方位と主柱配置の２点において他と相違するが、これをもって同時存在の可能性を否定することはできまい。またＳＢ５とＳＢ６は余りにも近接しており両者の共存は物理的に不可能であり、遺物の出土状況からＳＢ５がＳＢ６に先行することは前述した。したがってＳＢ１・４・７とＳＢ５が、あるいはＳＢ１・４・７とＳＢ６とが共存する可能性はある。

各竪穴住居間には建築構造上の多くの共通性が見出せる。竪穴住居の平面形はすべて方形で、主柱・竈・貯蔵穴を備えており、認められる差異はその規模と周溝の有無だけといってよかろう。土器組成も含め各竪穴住居はほぼ等質の属性をもち、１棟ごとの機能差や個性は見出せない。東壁に竈の取付くＳＢ３を除いて、他はすべて北壁に竈をもつ。なお確認されたすべての竈は、長方形プランの竪穴住居の長辺側に造られていることを付言しておきたい。

古墳時代後期になると貯蔵穴の位置は竈横に定着し、[38]「この方式は、奈良・平安時代においても、関東地方はもとより、東北地方から九州にかけて汎日本的に継承されている」[39]という。しかし当遺跡の竪穴住居における貯蔵穴の位置については、竈の右横にあるものより竈に対向する床面隅にあるものの方が優位である。これを地域性と解すべきか否かは、今後の同時代の類例を待って判断したい。

2　遺物について

竪穴住居出土遺物の中にはミニチュア土器・手捏ね土器が４点含まれる。それらはＳＢ1•4•6の竈内ないしは竈周辺から出土している。竈祭祀に関わる遺物であろう。ＳＢ1•4•6出土の須恵器はともに陶邑のＴＫ10型式に併行し、時期は６世紀中葉と考えられる。同時存在の可能性をもつこの３棟の竪穴住居からのみミニチュア土器・手捏ね土器の出土が認められたのは示唆的である。「カマド祭祀は各住居の個別祭祀のように考えられがちであるが、古墳時代では集落全体(大規模なものでなく数軒からなる単位集団)の意図をうけて実施されていた可能性が強い」[40]という指摘もある。なおこの４点の土器(12•51•52•73)には形態上の類似性は見出せない。

器種構成に関しては、高杯の出土がきわめて少ないということを指摘しておきたい。包含層出土遺物も含めた全遺物の中で、わずか２点（28•30）を確認しただけである。庄内式後半期に併行する土師器高杯(30)は竪穴住居の埋没時に混入したものであり、須恵器高杯(28)は６世紀前葉のＳＢ２に伴うものである。６世紀中葉以降の他のすべての竪穴住居は、その器種構成の中に高杯をもたない。古墳時代後期における竪穴住居内の容器組成に関して、「室内容器の主体は甕と杯•埦であり、前代までの大小の壺•鉢・高杯等はおおむね姿を消し、容器組成は単調になる」[41]という指摘があるが、当遺跡の場合も例外ではない。

籠目土器　器壁に籠目の圧痕の認められる土器があるが、これらは「笊形土器」「籠型土器」「籠目土器」などと呼ばれており、まだ呼称は定まっていないようである。器壁に残された圧痕には通常、網代編み・綾編み・ザル目編みの３種の編み方か認められ、当然押圧原体は籠と呼ぶべきものである以上、笊形土器という呼称には首肯しかねる。縄文土器の

中に、笊や籠などの編物の文様を土器面に丹念に写したものや、土器の形態をことさらに籠形に模したと思われるものが存在するが、これらも籠型土器と呼ばれている[42]。また土器製作の際に籠を型として成形した土器という観点から、籠型土器と呼称する立場もある。土器の成形を目的として籠型が選ばれたのではなく、籠目痕を施文技法・装飾技法の所産と考える立場から、ここでは「籠目土器」と呼ぶことにする。ただし焼成後に籠で包まれた、あるいは籠で包まれた痕跡を有する、いわゆる「被籠土器[43]」は含まない。

1980年、植松なおみ氏によって、茨城、大阪、奈良、和歌山、三重、岡山の6府県13遺跡の「カゴ型土器」の集成がなされたが[44]、それ以降の資料の収集は、時間的な制約のためにほとんどできず、わずか埼玉に1例の新資料を得たに過ぎない[45]。ともあれ籠目土器の出土例は全国的にもきわめて少ないといえよう。

県内では当遺跡を含めて伊賀国に3例、伊勢国に2例の出土を確認している。上野市大内に所在する北堀池遺跡[46]、名張市井手に所在する城屋敷遺跡[47]では、ともに竪穴住居跡から籠目鉢が出土している。前者の竪穴住居の時期は、「弥生時代最末から古墳時代初頭と考えられ[48]」ている。後者の場合は、切り合い不明の重複する2棟の竪穴住居から出土しており、「いずれかが纒向1式でもう一方が纒向4式に相当する[49]」という。籠目鉢もそのいずれかに併行するものであろう。

伊勢国の2例はともに松阪市から出土している。伊勢国花岡出土とされるものが、高橋直一氏の「笊形土器考[50]」に報告されている。花岡地区は阪内川中流右岸、金剛川上流域に位置する。同書には籠目部分の拓影が掲載されているのみで器種の特定はできないが、押圧原体の籠に網代編み・綾編み・ザル目編みの3種の手法が用いられていることは確認できる。これは「弥生式系と考へるのが穏當」と記されている。遺跡名・出土状況は不明である。もう1例は平成2年度県営圃場整備事業に先だって行われた試掘調査の際に、阿形遺跡[51]から出土した籠目土器である。阿形遺跡は阪内川をはさんで花岡地区の対岸に位置する。器種は甕ないしは壺であろう。これは器壁が厚く、底が平坦で、外面には黒斑が認められる。底部内面は指オサエ・ナデが施され、側部内面は板状具によってヨコナデされている。側部のザル目編みは明瞭であるが、底部の籠目はわずかに認められる程度で、編み方を確認することは困難である。底部の籠目は意識的にナデ消されたのであろうか。あるいは籠型から土器を外した後、底部を平坦にするために内側から強いオサエ・ナデが施された結果、外面の籠目痕が潰れたのであろうか。網代編みを用いた籠の底部は必然的に四角形となり、その四隅が小さく突出する。また底部中央がわずかに窪む例も多い。この四隅の突出、あるいは中央部の窪みを、内側からの押圧によって修正した可能性はある。いずれにしろ籠目痕は明瞭に器面に残されるのが通例であり、このような例はむしろ稀少といえよう。この土器には籠の口縁部までの圧痕が残っており、押圧原体の籠は口径約18cm、器高約5cmと推定される。籠の口縁端部のタガ状の縁の痕跡は認められない。この土器の出土状況は、籠目土器の性格を考える上できわめて示唆的である。調査担当者の言によると、2m×2mの試掘坑全面に多量の土師器が出土したという。その中には多くの完形品が含まれ、手捏ね土器・高杯がそれぞれ数点確認されている。高杯は布

No	遺跡名	所在地	出土地点	時期	器種	備考	文献
1	天道	伊賀町西之沢	竪穴住居跡	古墳初頭	甕か壺	3個体	当報告
2	北堀池	上野市大内	竪穴住居跡	弥生末～古墳初	鉢		註（46）
3	城屋敷	名張市井手	竪穴住居跡	弥生末か古墳初	鉢		註（47）
4	阿形	松阪市阿形町	試掘坑	古墳前期	甕か壺		
5	不明	伊勢国花岡	不明	不明	不明		註（50）

Tab.7　三重県内出土籠目土器一覧表

留式後半期に併行するものと考えられる。また結晶片岩製の有孔円盤も数点出土している。試掘結果一覧表には「祭祀遺構？」と記されている。

籠目土器はその出土例がきわめて少なく、時期や分布や出土状況に顕著な偏在性が認められる。その出現時期は弥生時代末期から古墳時代中期に集中するようである。また一遺跡から出土する数もきわめて僅少であり、複数個発見される場合でも、一遺構からまとまって発見されることが多い。以下に時期・出土遺構・器種について若干の私見を述べたい。

籠目土器の出現時期は前述の通りであるが、茨城県馬渡遺跡の埴輪製作址粘土採掘壙から1点の例外が出土している[52]。「口径15.2cm、高さ5cmを測り、口縁部外面に不明瞭ではあるが稜をつくり出し、立上がり口縁となる」「杯形土器[53]」である。立上がり口縁部と底部を除く側部には、明瞭な籠目圧痕が認められる。記述はないが、拓影を見る限り底部は手持ちヘラ削りされていると思われる。本遺跡は6世紀中葉から7世紀前半に比定され、籠目土器の最も新しい出土例である。

籠目土器を出土している18遺跡の中に、古墳が6基含まれている。奈良県のウワナベ古墳・古市方形墳・巣山古墳、岡山県の金蔵山古墳・月の輪古墳・陣馬山古墳である。これらの古墳の築造時期がすべて古墳時代中期に属するのは偶然であろうか。古墳以外の出土例は、古墳時代前期に属するものが多いようである。今後の出土例の増加が待たれる。

籠目土器の出土遺構は次の4種に大別できる。古墳・竪穴住居跡・溝・祭祀的遺構である。5世紀前半に比定される金蔵山古墳では、両面に籠目圧痕を有し、酸化鉄朱が施された、完形3個体を含む6個体の籠目皿が出土している[54]。出土地点は後円頂部で「あたかも主體埋葬後、墳頂における葬送儀禮をものがたるような状態にあった[55]」という。また5世紀中葉の月の輪古墳では、造出し部から舟形土製品とともに皿状の籠目土器が出土している[56]。これにも内外両面に籠目圧痕が認められる。これらは古墳祭祀に関わる遺物と考えられよう。

竪穴住居跡からの出土例は、北堀池遺跡・城屋敷遺跡にある。天道遺跡の場合は、竪穴住居の伴出遺物とは認められず、埋没時に混入したものと考えられる。

誉田白鳥遺跡では、同一の素掘溝から3個体の籠目土器が出土している[57]。ともに直径約10cm、高さ約3cmの皿状の土器で、内外面に籠目痕が認められる。ただし内2点の土器の内面底部には籠目痕がない。なおこの溝のある地区内から土馬が出土している。纒向遺跡の溝からは、胴部下半に籠目痕のある壺が出土している[58]。この時期は纒向1式に属する。

祭祀的な遺構からの出土例は、前述した阿形遺跡にある。これと類似した出土状況を呈するものに、埼玉県の塩西遺跡の例がある。平面形3.5m×2.1mの長楕円形を呈する土坑から、手捏ね土器・小形器台などの完形品を含む40個体ほどの土器とともに、籠目圧痕のある「埦型土器」が出土している[59]。これにも土器の内外両面に籠目痕が認められる。調査概要には「本跡の性格を考える時、遺物の出土状況、器種の組成から、何らかの祭祀的な所産と考えることができるかもしれない」と記されている。この遺構の時期は古墳時代初頭と考えられている。

籠目土器の器種は、押圧原体の籠に類似した形態をもつもの（便宜上これをA種と呼ぶ）と、それ以外の壺ないしは甕（B種）の2種に大別できよう。各報告書によって皿・浅鉢・鉢・埦などと様々に呼称されているが、それらは押圧原体の籠の形態差に起因すると考えられる。B種の出土例は少なく、纒向遺跡・天道遺跡・阿形遺跡にみられる。A種には外面にのみ籠目痕をもつもの（A_1種）と内外両面に籠目痕をもつもの（A_2種）とがある。A_1種は馬渡遺跡・国府遺跡[60]・北堀池遺跡・城屋敷遺跡に、A_2種は金蔵山古墳・月の輪古墳・古市方形墳・塩西遺跡に出土例がある。古墳からはこの籠目土器A種の出土がきわめて多い。

資料の制約はあるものの、籠目土器の性格の一端は窺い知ることができよう。出土遺構や出土状況から、祭祀用の特別な土器である可能性が高い。また器面に施された籠目は装飾を目的としていると思われ、土器の成形技法の所産であるとは考え難い。土器の成形を目的として籠型が選ばれたのではなく、籠目を器面に付けること自体を目的とする装飾技法ないしは施文技法の一種としてとらえるべきであろう。籠目土器を、籠型を用いた成形技法の所産とす

る立場からは、内外両面に籠目を施した籠目土器A_2種の存在は理解できない。この籠目土器A_2種などは、まるで土器による籠の再現を意図しているかのようである。籠ないしは籠目そのもののもつ意味をも考えさせられる資料である。今後籠目に込められた意味を追求していくには、民俗学的視野からの検討が不可欠であろう。

3　まとめ

縄文時代　当遺跡の始まりを語る遺物は、後期前葉であり、やや間をおいた中葉(91)や末葉の例(93)も含む[61]。波状口縁例(91)は、北白川上層Ⅲ式や加曽利B_1式に近似し、あえて求めれば、大阪府の淡輪遺跡に類例がある[62]。末葉の例は宮滝式の新しい部分に類似する。

弥生時代　縄文時代晩期や弥生時代前期には断絶した当遺跡も、弥生時代中期に入るとしばらく人が住んでいたようである。彼らの残した土器である受口甕や、ハケ調整後にクシ状具による羽状文を配した受口壺などに地域色が認められ、当時の地域間交流の様相を示唆している。すなわち、前者の受口甕は三重県下や近江地方に多く、後者は北伊賀や鈴鹿川流域に目立つ。

古墳時代　弥生時代後期の遺物は認められないが、古墳時代初頭の籠目土器などが少量出土している。当遺跡が最も賑やかになるのは古墳時代後期の6世紀頃である。竪穴住居群が検出されたが、道路予定地という細長い調査区のために、集落分析は困難である。

平安時代　7世紀以降、また当遺跡に人跡は途絶えるが、平安時代後期に入って再び人影が認められる。しかし従来のように台地縁辺部を中心とせず、縁辺部からやや後退した南方を中心に利用している。性格不明のＳＫ10をはじめ、多少の柱穴も認められたが、この南方部は村はずれであったと思われる。この平安時代は12世紀を中心とするが、10世紀の土器(89)も出土している。

なお第Ⅳ層は、いわゆる「黒ボク」と呼ばれる。伊勢地方の平野部には普遍的に見られる。これは中世に至る間に植物質が堆積したものらしいが、伊賀地方ではほとんど見られない。にもかかわらず当遺跡周辺には認められる。当遺跡周辺の植生と気候などを考慮する上で無視し難い事象である。

〔註〕

(1) 『東山古墳・桶崎氏城現地説明会資料』三重県教育委員会 1986
(2) 『伊賀町史』伊賀町 1979
(3) 『故さとの歩み』阿山町教育委員会 1980
(4) 梅原末治『銅鐸の研究』 1927
(5) 岡本武和・藤井尚登『奥弁天4号古墳・源六谷1号古墳』阿山町教育委員会・阿山町遺跡調査会 1989
(6) 『北中溝遺跡発掘調査ニュース』三重県教育委員会 1987
(7) 『伊賀国府推定地範囲確認調査ニュース』№2 三重県教育委員会 1988
(8) 前掲註(1)
(9) 前掲註(2)
(10) 吉水康夫『筒御前古墳発掘調査報告』伊賀町教育委員会 1977
(11) 前掲註(10)
(12) 前掲註(10)
(13) 『三重の遺跡』昭和53年度日本考古学協会秋季大会三重県実行委員会 1978
(14) 前掲註(13)
(15) 前掲註(5)
(16) 『北堀池遺跡発掘調査報告 第一分冊』三重県教育委員会 1981
(17) 森前稔・中村信裕ほか「辻垣内遺跡・上東野遺跡」『昭和57年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1983
(18) 『坂之上遺跡現地説明会資料』三重県教育委員会 1988
(19) 『小上野西谷遺跡現地説明会資料』三重県教育委員会 1987
(20) 前掲註(6)
(21) 『三重県埋蔵文化財年報』三重県教育委員会 1988
(22) 駒田利治『的場遺跡発掘調査報告』伊賀町教育委員会 1978
(23) 『宮ノ森遺跡発掘調査概要』上野市教育委員会・上野市遺跡調査会 1979
(24) 山本雅晴『喜春遺跡群発掘調査報告』上野市教育委員会・上野市遺跡調査会 1982
(25) 前掲註(7)
(26) 前掲註(2)
(27) 前掲註(10)
(28) 前掲註(22)
(29) 石部正志ほか『霊山山頂遺跡予察調査報告書』伊賀町教育委員会 1986
(30) 石野博信「古代住居の日常容器」『橿原考古学研究所論集第六』吉川弘文館 1984
(31) 田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ 1966
(32) 杉山寿栄男『日本原始繊維工芸史 原始編』北海道出版企画センター 1979
(33) 『江南村内遺跡群Ⅰ』埼玉県大里郡江南村教育委員会 1984
(34) 小林行雄『続古代の技術』塙書房 1964
(35) 前掲註(33)
(36) 山田猛「伊賀の瓦器に関する若干の考察」『中近世土器の基礎研究Ⅱ』日本中世土器研究会 1986
(37) 田中琢「畿内」『日本の考古学Ⅵ』河出書房 1969
(38) 宮本長二郎「古代人の住まい」『別冊歴史読本』新人物往来社 1984
都出比呂志「家敷地の成立」『世界考古学大系 日本編補遺』天山舎 1987
(39) 石野博信「考古学から見た古代日本の住居」『日本古代文化の探究・家』社会思想社 1975
(40) 寺沢知子「祭祀の変化と民衆」『季刊考古学』第16号 雄山閣 1986
(41) 前掲註(30)
(42) 前掲註(32)
(43) 後藤信祐氏が「被籠土器考」(『栃木県考古学会誌』第11集 1989)で、53遺跡89例を集成している。
(44) 植松なおみ「古代遺跡出土カゴ類の基礎的研究」『物質文化』第35号 1980
(45) 前掲註(33)
(46) 『北堀池遺跡発掘調査概要Ⅱ』三重県教育委員会 1979
(47) 『城屋敷遺跡』名張市教育委員会 1985
(48) 前掲註(46)
(49) 前掲註(47)
(50) 高橋直一「笊形土器考」『ドルメン』3巻 10号 1934
(51) 『松阪市史 第二巻 史料篇 考古』 1977
(52) 大塚初重・小林三郎『茨城県馬渡における埴輪製作址』明治大学文学部研究報告 考古学第6冊 1976
(53) 前掲註(52)
(54) 西谷真治・鎌木義昌『金蔵山古墳』倉敷考古館 1959
(55) 前掲註(54)
(56) 近藤義郎『月の輪古墳』 1960
(57) 野上丈助『誉田白鳥遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会 1972
(58) 石野博信・関川尚功『纒向』奈良県桜井市教育委員会 1976
(59) 前掲註(33)
(60) 前掲註(33)(34)(44)
(61) 奥義次氏らの教示を得た。
(62) 藤永正明『淡輪遺跡発掘調査概要報告書Ⅷ』大阪府教育委員会 1987

図　　版

調査区遠景（南から）

調査区全景（南から）

ＳＢ１・２（東から）

ＳＢ１の竈（南から）

ＳＢ４（南から）

ＳＢ７（北東から）

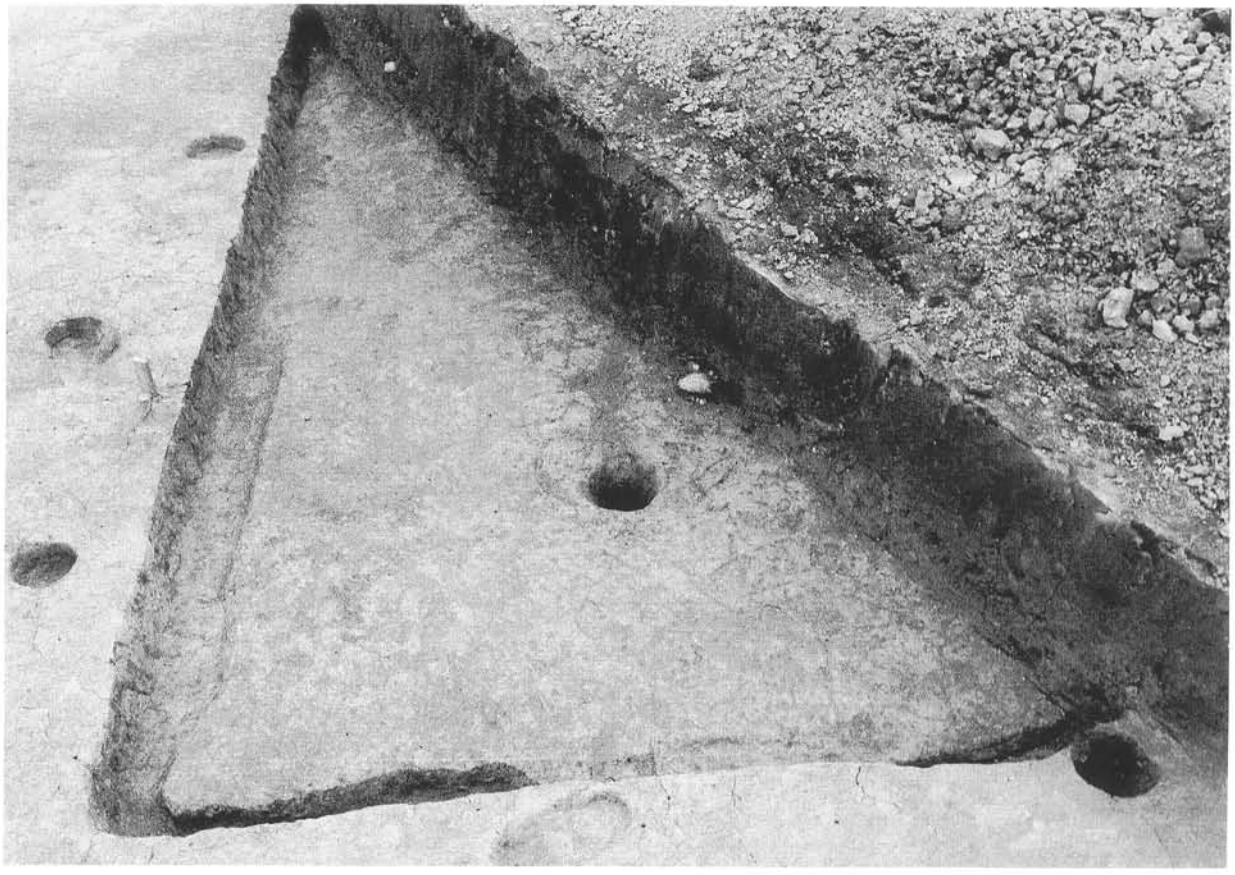
ＳＢ７の竈（南東から）

ＳＢ７の貯蔵穴（北西から）

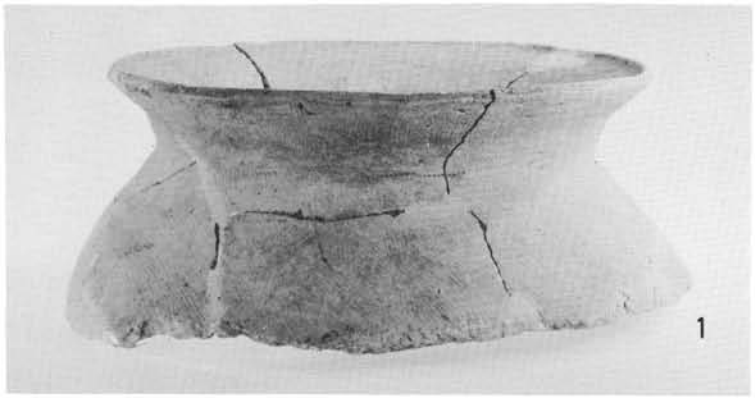
ＳＢ６（西から）

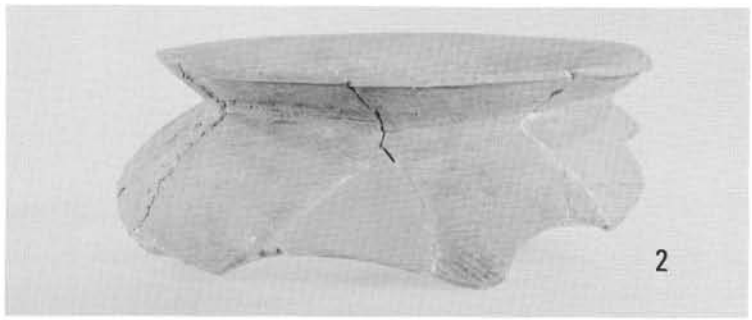
ＳＢ６の竈（南から）

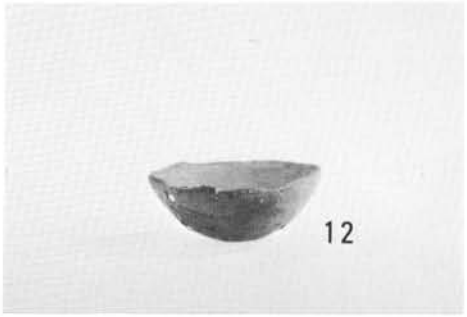
ＳＢ５・６（南から）

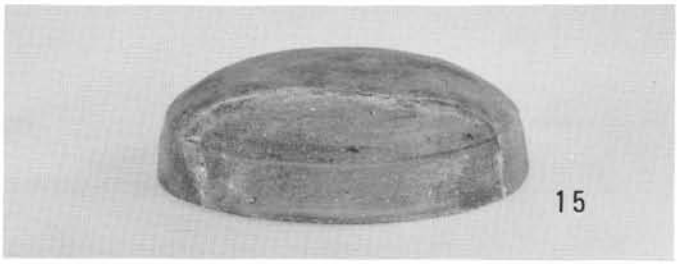


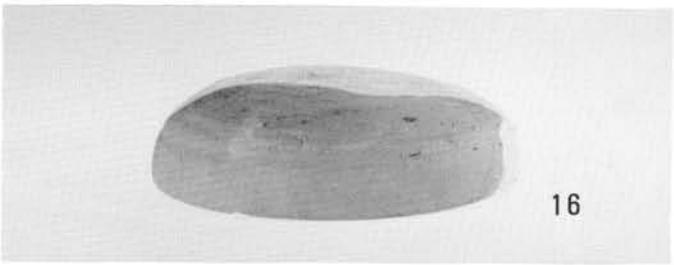
ＳＢ８（南から）

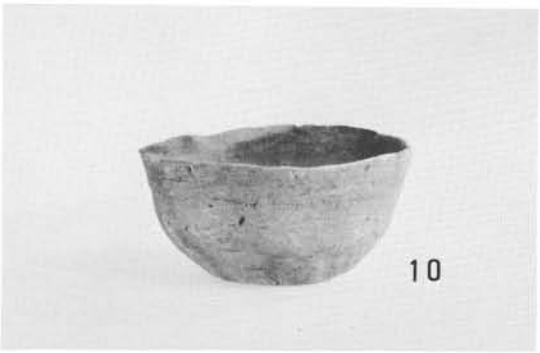




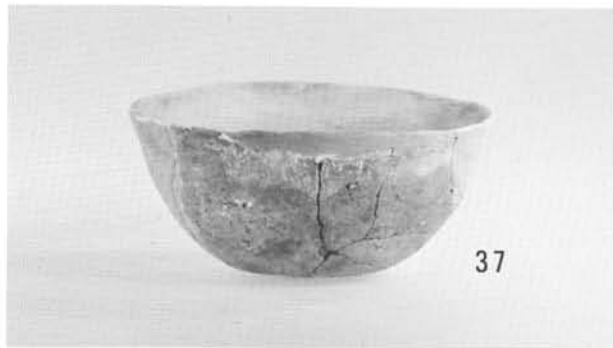


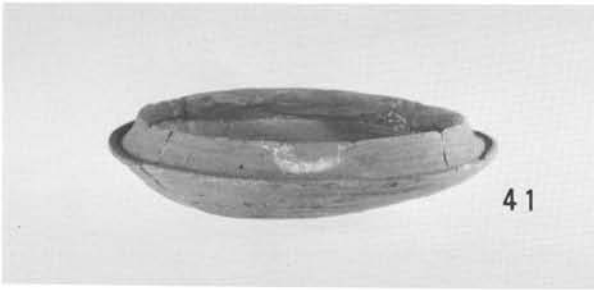


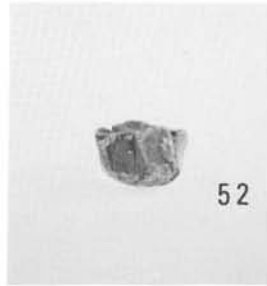




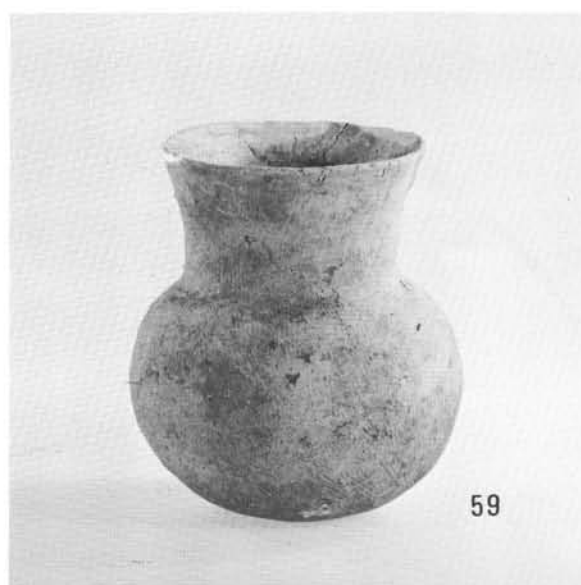
出土土器 (1) (1 : 3)

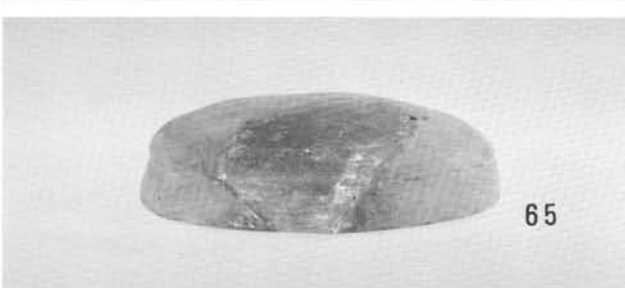




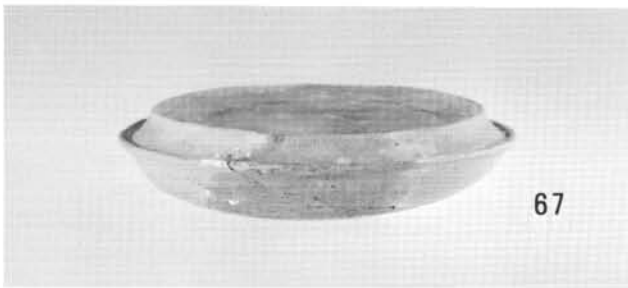


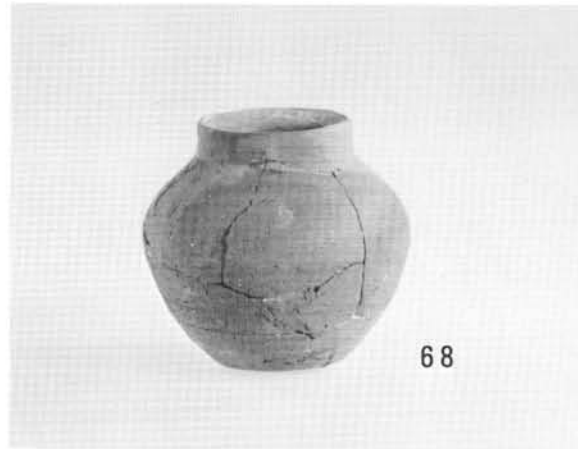
出土土器 (2) (1 : 3)

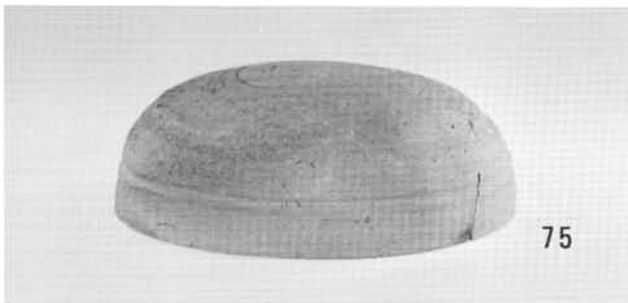


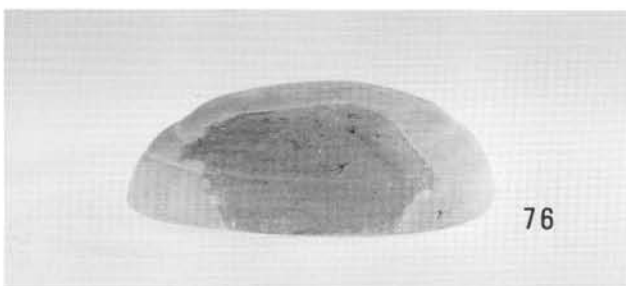


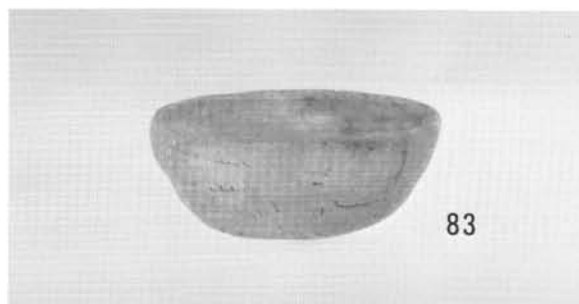
出土土器 (3) (1 : 3)

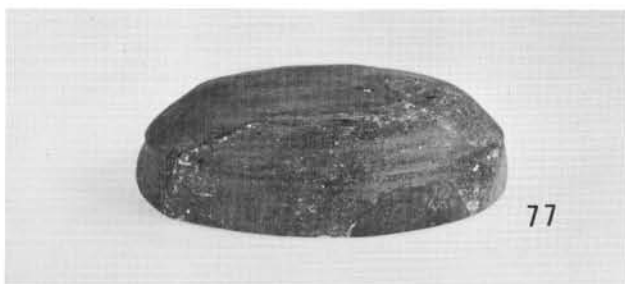


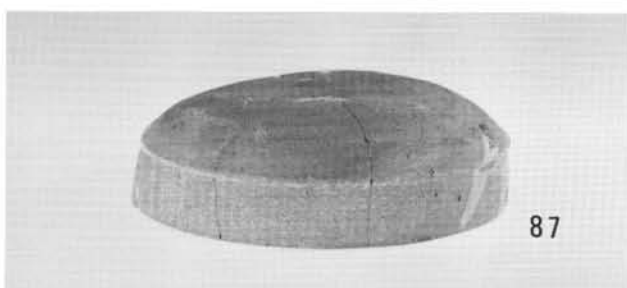


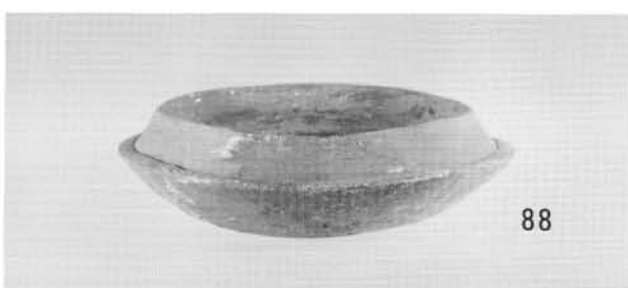




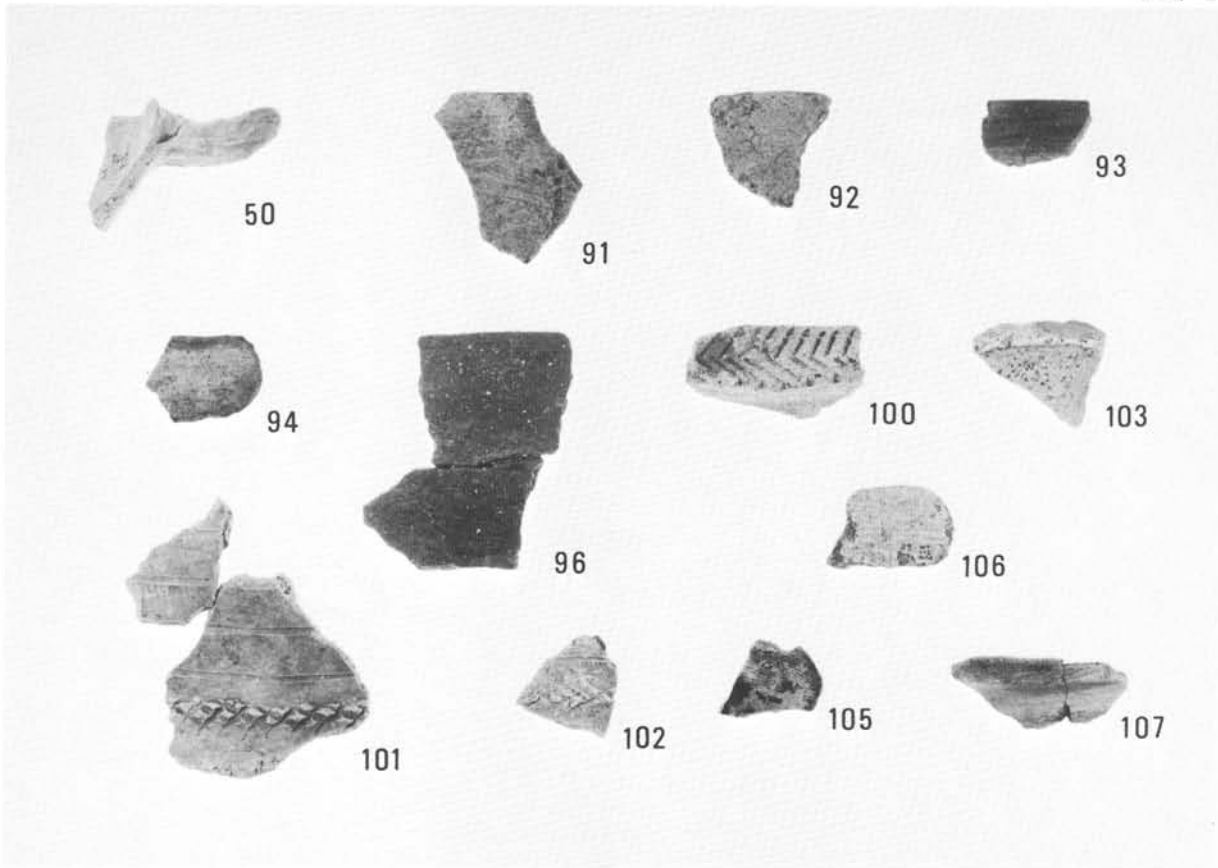




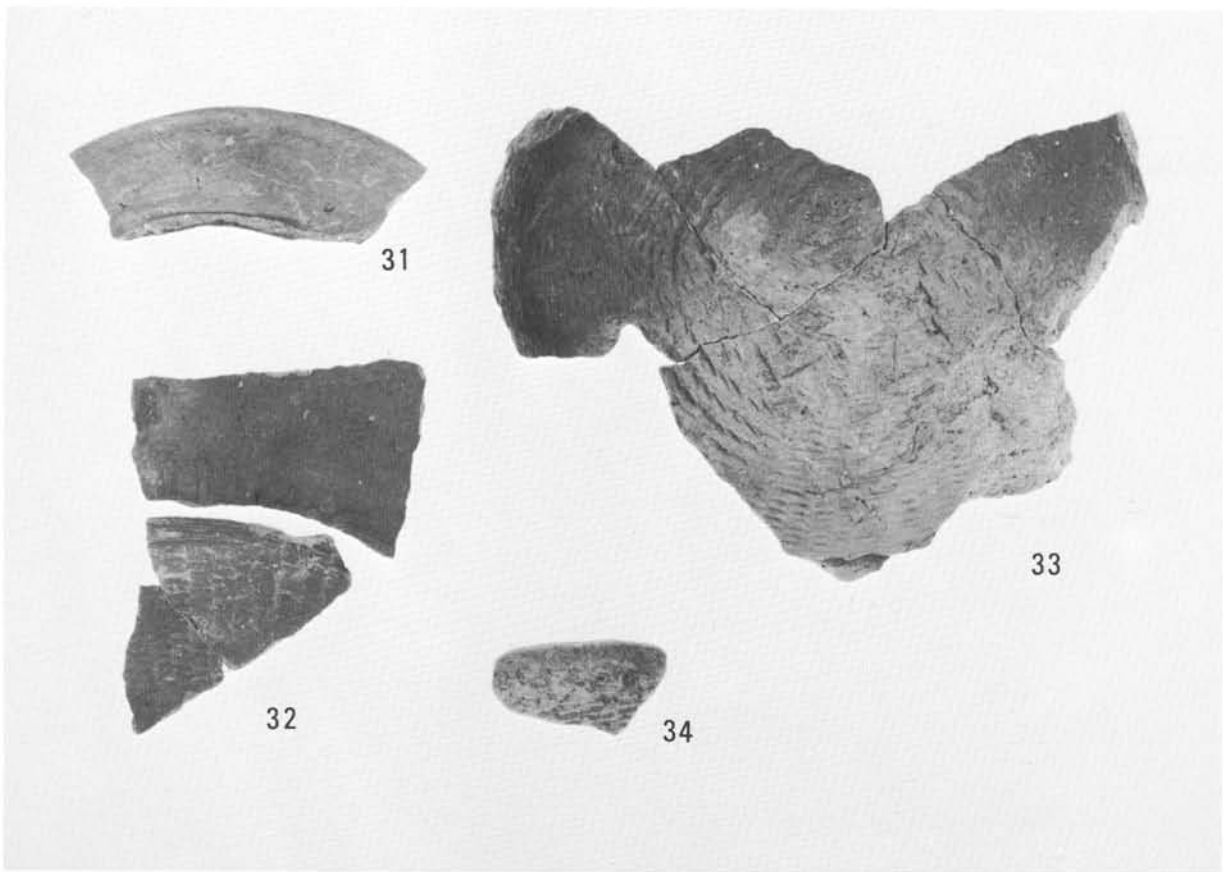




出土土器 (4) (1 : 3)



出土土器 (5) (1 : 3)



籠目土器 (1 : 2)

平成元（1989）年３月に刊行されたものをもとに
平成18(2006）年６月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告89

天道遺跡発掘調査報告

１９８９年３月

編集
発行　三重県教育委員会

印刷　ユニック印刷株式会社